

NEWSLETTER No.126 **TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ**
 ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music February 13, 2026

一般社団法人 **東洋音楽学会** **会報** 第**126**号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
 事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
 ●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

目次

第76回大会レポート..... 1	ICTMD (国際伝統音楽舞踊学会) に関するお知らせ 1 6
第25回通常理事会・総会議決事項のお知らせ..... 1 0	RILM (音楽文献目録) 委員会からのお知らせ..... 1 7
日本学術振興会賞の学会推薦について..... 1 1	大貫紀子先生を偲んで..... 1 7
第1回定例研究会レポート..... 1 1	会員異動..... 1 8
第2回定例研究会レポート..... 1 3	図書・資料等の受贈..... 1 8
これからの定例研究会予定..... 1 4	新刊書籍..... 1 8
情報委員会からのお知らせ..... 1 5	新発売視聴覚資料..... 2 0
第43回田邊尚雄賞アンケートのお願い..... 1 5	編集後記..... 2 0
会員の受賞..... 1 6	第14回定時社員総会議事録(抄)・添付書類..... 2 2
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど..... 1 6	

第76回大会レポート

(2025年11月29~30日 沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス)

第1日(11月29日)

◇研究発表I-A(司会:三島わかかな)

地方都市における洋楽受容と日露戦争—鹿児島県を中心に—

発表者:玉城菜々子

本発表の目的は、日露戦争期の鹿児島県内での洋楽の担い手と背景をひもとくことを通じて、地方都市における洋楽受容の過程の解明にある。方法は、明治30年代の「鹿児島新聞」「鹿児島実業新聞」の悉皆調査で収集した洋楽関連記事(約750点)の分析による。日露戦争期の明治37~38年を中心に軍楽隊の模倣集団として設立された「民間楽隊の普及」ならびに「軍歌の創作活動」について報告された。

本県の洋楽受容の特色は明治期成立の「学舎」(男性の社会・青年教育制度)に見いだされる。学舎には「楽隊」が設置され、洋楽器だけでなく天吹や薩摩琵琶などの伝統楽器も編成

された。また、日露戦争期には新聞社が軍歌を公募し、県内の学校教員が軍歌を活発に創作した。本県の特色は「学舎」的な封建的価値観にあると結論づけた。

井上さゆり氏から、軍歌《上村将軍》の作曲者出身地について質問があり、軍歌創作の多くが他府県から着任した音楽教員の手によることが確認された。三島わかかな

1928年の昭和大礼における音楽行事

—近衛秀麿・諸井三郎の事例の検討を中心に—

発表者:東館祐真

本発表の目的は、昭和大礼関連の音楽行事ならびに創作作品の特色を明らかにすることにある。方法ならびに構成は、①昭和大礼にちなんだ奉奏・奏楽および音楽事業の概観、②昭和大礼にちなむ音楽行事(洋楽中心)の概観、③近衛秀麿《大礼奉祝交声曲》ならびに諸井三郎《御大典奉祝国民歌》の作品様式の検討による。

《大礼奉祝交声曲》は近衛の創作史上最大規模の作品であり、《御大典奉祝国民歌》は諸井の作曲家としてのキャリア形成における大きな一歩として結論づけた。そして昭和大礼は

洋楽普及を促進させるとともに、1930年代以降の戦時期における国威発揚に洋楽が利用されていくことの先触れだったと結論づけた。

高久暁氏から「奉祝歌発表会」のプログラム内容の質問があり、《御大典奉祝国民歌》の他に室内楽3曲と《頌歌》という内容から、同会ではオーケストラ編成ではなく室内楽編成の可能性が指摘された。筆者の要望として、検討作品の音源を多少なりとも流して欲しかった。 三島わかかな

昭和戦前期の日本における讃美歌受容の側面

一吉川二郎による『福音新報』関連記事を中心に

発表者：李惠平・松橋輝子（非会員）

本発表の目的は、吉川二郎（1897-没年不詳）が昭和戦前期の軍国主義と植民地主義が台頭しつつあった時代背景のもと、第一線で宣教活動を続けた吉川の讃美歌観を読み解くことにある。先行研究とは異なる新たな立場から日本での讃美歌受容の側面に光を当てた。方法は、『福音新報』（1842年休刊）に掲載された讃美歌に関する吉川の連載記事（合計72本）の分析による。

1930年代の讃美歌集編纂事業において中心的役割を果たした指導者たちの讃美歌観と、吉川のそれとは一線を画するものだったと指摘した。具体的には、讃美歌編集委員は讃美歌集に日本人の創作による新曲の追加などを検討していた態度に対して、吉川は英米圏の英語文献にもとづく讃美歌の詳細解説をはかるなど「原文・古典至上主義」に徹し、教会における讃美歌の重要性を説いた。

劉麒玉氏から、吉川の外地経験から被植民者への言説に配慮があったかという質問があり、そういう点で吉川らしさは確認できないことが確認された。 三島わかかな

◇研究発表 I - B (司会：久万田晋)

鶴見区と川崎区の琉球芸能実践

一沖縄一世から二世への継承— 発表者：澤田聖也

本研究は、神奈川県鶴見区と川崎区在住の沖縄系人一世と二世における琉球芸能の実践について、資料調査及び現地取材を行い、当時の琉球芸能がどのように認識され、一世から二世へと継承されていったかを捉えるという内容だった。

発表者は7年前から鶴見区を中心に現地調査を行い、現地で行われたイベントの取材時の様子が写真で紹介される場面もあった。発表ではパワーポイントが用いられ、複雑な話題も図解で分かりやすく解説されていた。

移民研究とディアスポラ研究の違い、そして本研究がディアスポラ研究の位置づけであることが明確に述べられ、一世と二世の琉球芸能に対する意識の違い、二世による沖縄中心主義からの脱却及び多角的な中心性の主張、また、一世にお

ける琉球芸能のオーセンティシティという認識の強化と二世への継承の難しさが言及された。

質疑では、無形民俗文化財との関連や、南米系人と川崎在住者との関係について、話題が展開された。

多和田真理

女性による歌三線演奏様式の変遷

一音声分析ソフトを用いた分析— 発表者：山本佳穂

本発表では、女性による歌三線の演奏、とくに声楽部に焦点があてられ、対象となる楽曲の発表者自身による採譜と音響分析ソフトを用いた視覚化による相互補完的な分析を行い、3つのグループ(草分け世代、沖芸大琉球芸能出身でない世代、沖芸大琉球芸能出身世代)に共通する特徴や差異について、考察結果が示された。

結果として、3つのグループに共通するのは、演奏全体を通して4000ヘルツ付近の音成分が常に一定以上含まれていること、第1・2グループでは、4000ヘルツ付近の音成分が高音部の歌唱に多くみられること、第3グループでは、高音部や声区転換の部分「尺」で4000ヘルツ付近の音成分が弱まることが示された。

以上の考察結果から、第1グループは従来の伝統的な歌三線らしさを重視し、男性と同じような歌唱を目指していることに対し、第3グループは、女性ならではの音楽表現を模索し、それが新しい歌三線の歌唱表現につながっていると仮説が述べられた。

多和田真理

島から島へ—台湾における沖縄民謡の受容と文化実践—

発表者：鮎沛蘭

本研究の発表者は、台湾出身で現在、琉球大学に留学中であり、発表者自身初めてとなる日本語での学会発表とのことだったが、はっきりとした口調で明るい印象だった。

発表では、台湾における沖縄民謡の受容と文化実践について、発表者が参与観察を行っている台湾民謡サークル「沖縄大学」の取り組みが紹介された。

サークルでは、石垣島出身の講師から八重山民謡を学んでいること、台湾人として八重山民謡を学ぶ点について、身体表現を学ぶ必要があること、言語や発音などに課題があることが紹介された。また、活動の一環として、サークルの会員は毎年、石垣島を訪れ、歌碑巡りや歌に出てくる植物を探したりし、その花を見たり、匂いを香ってみることを大切にしているという話題が、筆者にとって印象的だった。

そして、石垣島出身の講師が台湾を訪れた際、台湾の民謡を歌三線で演奏した様子も紹介され、音楽を通じた友好的な文化交流の実践の在り方が示された。

多和田真理

◇研究発表 I-C (司会：福岡正太)

対話的文化資源としての日本民俗音楽録音資料

発表者：植村幸生(代表)・岡田恵美・金城厚・藺田郁

これまでに蓄積されたフィールドワークに基づく日本民俗音楽の大規模な録音アーカイブとしては、国立民族学博物館所蔵の東洋音楽学会資料などが知られており、そのほか私蔵のフィールド録音も多数あると考えられる。これらは研究資料として活用されていないだけでなく、伝承地を含む一般には資料の存在がまったく知られていない。これらの課題解決に取り組むべく2021～2024年に国立民族学博物館共同研究「民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化」が行われた。本発表はその成果の一部である。

まず代表の植村から、研究の概要と理論的な全体像が述べられた。共同研究が掲げたいくつかの目的のうち、本発表においてはフィールド録音の伝承地への還元と文化資源化に着目し、研究者が現地に向かい録音を聴いてもらったうえでヒアリングをおこなう「音源試聴会」の実践報告などが中心になることが示された。

岡田はまず、自らが行ったフィールドワークとして〈糸満ハーレー歌〉黒島の綱引き歌〈正月ユンタ〉における伝承の現状と課題について紹介した。このうち黒島において音源試聴会を実施し、古謡が多数収録されていることへの驚きや現在の伝承と異なることへの異質感が語られる一方で、失われつつある黒島方言が歌として残ることに期待する声などが聞かれたという。近年研究者には記録や保存だけでなく実践的な役割への転換が求められており、当事者と対話をしながら関与していくことの重要性を主張した。

つぎに金城は、1979年に録音した沖縄県浦添市沢岬の稲作儀礼歌〈アマウエータ〉の音源を、復活を目指す地元の方に提供した事例を報告した。復活した〈アマウエータ〉は、録音を通して意味を再認識したうえで、脈絡を変えてあらたな芸能となったことを映像とともに紹介した。研究者は、伝承者からの要望に応じる場合でも外部観察者の視点であってもモラルを遵守すべきであること、また論文や報告書の作成など目的を果たしたあとは、一般にも分かりやすい方法で資料を公開すべきとの提言があった。

藺田は、高知県の二つの地域(香南市夜須町、香美市物部町)で実施した盆踊り歌の音源試聴会について紹介した。両者は伝承の実態も試聴後の感想も対照的であったという。対象地の選定やフィールド録音の還元においては、伝承の状況だけでなく、担い手や地域との関係についても注意を払う必要があることを述べまとめた。

フロアからの質問にもあったとおり、フィールド録音内のプライバシーについては十分に配慮すべきであるが、対話を伴った還元の意義が各事例において明確に示された共同発表

であった。今後も地域を増やしながら音源試聴会の活動が続けられ、利活用の事例が積み重ねられることを期待したい。

大久保真利子

◇研究発表 II-A (司会：塚原康子)

明治後期の京都における演奏会—慈善音楽会に着目して—

発表者：丸山彩

本発表では、明治36～44年の京都でどのような慈善演奏会が開催されたかが、『京都日出新聞』を中心とした史料調査の結果に基づき明らかにされた。

京都ではこの当時「当道慈善会」が音曲会を開催していたが、『京都日出新聞』掲載の各事例からは、その他さまざまな団体が慈善演奏会を開催していたこと、その内容はピアノや尺八など和洋折衷のプログラムで組まれていたことが明らかになった。

会場からは、史料である『京都日出新聞』で報じられた内容の傾向について質問が挙がり、演奏の様子や、天候、観客の様子などがみられたとの回答があった。また、キリスト教関連団体が慈善音楽会にどのようにかかわったかという質問に対しては、今後の課題としつつも、同志社女学校など学校主催の慈善演奏会もみられたことが挙げられた。東京など他地域の演奏家とのネットワークが京都で形成されていたことも示唆された。今後さまざまな視点で調査が深められることを期待したい。

武田有里

戦後の芸能史研究と平出久雄

発表者：山田淳平

山田氏は、西山松之助『家元の研究』に結実した平出久雄と西山の交流を、赤穂市教育委員会蔵となった西山旧蔵資料中の平出書簡や西山の書写・翻刻史料から詳細に紐解いた。

両者の直接の交流は、林謙三を介して1956年発表の西山論文「江戸時代における三方楽家の相伝について」を読了した平出が、1957年2月12日付で書状を送付したのが初めという。その後の文通と平出宅での豊家門人帳や窪家・辻家文書の筆写により、西山は芝家史料のみに依拠した状況から三方楽家全体を俯瞰する方向へと転換し、雅楽に家元制度はないとする平出の批判から、不完全相伝の成立を家元制の要件と見なす家元制度研究の鍵となる着想を得、愛好者と楽人をつなぐ中間教授機構の存在に照らして雅楽でも化政期には家元制が成立していたと論じた。『家元の研究』の引用史料には現在所在不明のものも少なくないため、現存する西山旧蔵資料中の雅楽史料は今後の研究にも資すると結んだ。

塚原康子

日本と韓国における伝統楽器店に関する予備的研究

発表者：宮武苑子

宮武氏の発表では、日韓の伝統楽器店(和楽器店/国楽社)の現状と役割の比較をめざし、これまで実施した日本側調査と現在進行中の韓国側調査から、楽器店に関わるさまざまな側面(和楽器店の店舗数と分布、種目別の業務内容・利用者比較/鍾路・良才地区の国楽社にみる店舗成立背景・業務展開の2類型/教育機関との関係に関する日韓比較)が報告された。着眼点は大変ユニークで、発表内容も、たとえば2002年以降の中学校での和楽器実技導入は和楽器店に殆ど恩恵を齎さなかったという聞き取りの報告など、個々には非常に興味深く、質問も多数寄せられた。ただ、質問内容も示唆するように、この研究の「予備的」段階を打開するには、業態が多様な中どこまでを「楽器店」とするかといったデータ収集上の方針や研究視点と事例との整合性など、今後詰めるべき課題が多々ある。個別調査の積上げと枠組みの見直しを行き来しながら、意義ある研究成果に至ることを期待する。

塚原康子

◇研究発表II-B(司会：小西潤子)

視覚化されたリズム

—19世紀初頭西インドにおけるターラ・マーラーと

ペルシャ語音楽書『タブラーの理論書』との比較研究—

発表者：井上春緒

「ターラ・マーラー」は、19世紀初頭西インドで制作された作品群で、上段に精密なリズム記譜、下段に人物や神々、動物、儀礼舞踊、自然現象を描いた絵画からなる。発表者は、ターラ(リズム)の身体性、霊性、時間性に着目し、18世紀後半のペルシャ語音楽書『タブラーの理論書』との比較検討から、ターラ・マーラーにおける聴覚と視覚の共感的表象の意図を見出した。当時のインドのリズム理論に関する先駆的な研究として、今後の発展が期待される。

フロアーからは、ターラ・マーラーに関して、ラーガ(旋律)の由来を擬人的な家系図で示す「ラーガ・マーラー」との違いや、その用途、制作目的等に関する質問が出された。発表者は、ラーガ・マーラーが圧倒的な作品数を有するのに対して、ターラ・マーラーに記載されたターラ名は現存せず、作品数は32に限られること、ボール(口唱歌)と絵画表現、教育的価値、海外からの影響等について、今後追究可能な課題として応答した。

小西潤子

変化する演奏を支える楽譜

—ミャンマー古典音楽の伝承における楽譜の役割—

発表者：井上さゆり

サウンガウツ(竪琴)奏者ウー・ミンマウン(1937-2001)

は、民族音楽学者J. ベッカーからの影響で、膨大な数の手書き楽譜の作成と教授法を確立した。その死後、楽譜のバリエーションは生まれていないが、現在もその影響力は大きい。一方で、ミャンマー古典歌謡は基本的に口頭伝授され続けている。ウー・ミンマウンの楽譜は、音の固定化をもたらさず、楽器演奏は即興的なバリエーションを伴うものとなっている。本研究事例は、楽譜の役割や口頭伝授との併存を考える上で、興味深い。

フロアーからは、演奏中に様々なバリエーションが「混ざる」ことへの評価について質問があった。発表者は、歌の旋律はある程度固定しており、1曲中に同じ旋律が何度も出現すること、その際、楽器演奏者は無意識的・意図的に学習して蓄積したパターンのいずれかを選択すると説明し、指導者からも混ざるとは「悪い」とは評価されないと答えた。他の流派の楽譜使用については、今後の調査が必要とされた。

小西潤子

京劇《空城計》の花過門一流派の違いに着目して—

発表者：田野成

京劇の発展に伴い、その伴奏音楽の旋律「過門」から、装飾技法を用いた華やかな旋律「花過門」が生まれた。本発表は、中国中央電視台(CCTV)の番組『中国京劇音配像精粹』のアーカイブから代表的な花過門の部分を抽出し、余派(1925年)、楊派(1956年)、馬派(1962年)の各流派による花過門の違いを明らかにした。ひいては、京劇と伴奏音楽の歴史的变化の一面への貢献を目論む研究である。なお、CCTVは、過去の録音資料に復元映像を加えて放映を行っている。

フロアーからは、花過門成立期の時代背景や各流派の表現の特徴、役柄との関係等が問われた。発表者は、京劇の成立期にあたる余派の事例では花過門を使用せず、現在でもシンプルな演奏を続けていること、楊派と馬派の事例はさまざまな流派が新しい演出や音楽の演奏法を探究した京劇の発展期にあたることと応答した。なお、花過門は40~50代の歴史上の人物を扱った老生の役柄で多く使用され、女性や若い男性には用いないと述べた。

小西潤子

◇研究発表II-C(司会：遠藤徹)

語り物の楽譜としての胡麻

—金春善竹自筆譜と八左衛門本との比較から—

発表者：丹羽幸江

丹羽氏の発表は、胡麻を用いた語り物の楽譜の特有の性質を説明する第一歩として、室町時代の金春善竹自筆『五音三曲集』と、分家の八左衛門家安喜によって江戸時代初期に作成された写本の胡麻を比較したものであった。先行研究では

八左衛門本は誤写等はあるものの、節付けはほぼ忠実な再現を心がけたとされていたのに対し、丹羽氏は実際には八左衛門本の節付けに胡麻の向きや種類の選択などに改変が見られるとし、そこに五声を反映した禅竹自筆譜から八左衛門本の相対的な音高譜への時代的な変化や謡の語り物の楽譜としてのあり方の整備が反映されていることを指摘した。胡麻の記譜法の変化に着目して、語り物固有の楽譜の成り立ちを展望した興味深い発表であったが、質疑の中でも指摘があったように、声明などの周辺の楽譜や理論についての把握が不十分なように見受けられたので、今後により精度の高い論を構築するには、雅楽を含めた先行する楽譜や理論についての理解を深めることが必要のように思われた。

遠藤徹

陽明文庫『新撰笙笛譜』に見える特殊な記譜法について

発表者：李媛

李媛氏の発表は陽明文庫所蔵の『新撰笙笛譜』の特殊な記譜法の意味を考察したものであった。『新撰笙笛譜』は中世に遡る重要な笙譜の一つで、戦前よりその存在は知られていたが、これまでほとんど研究がなされてこなかった楽譜である。李媛氏は『新撰笙笛譜』の注目すべき特徴として大譜字の右下に付記されている小譜字に着目し、これらが篳篥、龍笛、琵琶などの他の楽器の旋律を記したものであるという仮説のもとに、時代が近い『三五要録』『註大家龍笛要録譜』『中原蘆声抄』と比較を試み、一致率の数値が示された。しかしそれを見る限りでは、いずれの楽譜とも必ずしも一致率は高くはないように見えるので、あるいは笙の唱歌を記したなどの別の可能性も考える必要があるように思われた。その他にも「叮」という表記が出現する箇所も示され、その意味するところの推察もなされた。今回の発表は『新撰笙笛譜』研究の第一歩になったものと言えるが、中世の笙譜は『新撰笙笛譜』に限られるものではないので、豊原家の笙譜との関係性ではどのように位置付けられるかなど、今後の進展に期待したい。

遠藤徹

中世笛伝承の考察—大神流の分枝と相克—

発表者：根本千聡

根本氏の発表は、中世の笛の伝承の中心にあった大神流について、笛譜を残した大神基政から大神景光の間の時代の実態の解明に向けて、嫡流と庶流の関係性について、とりわけ大神の祖とされる惟季から数えて5代目に当たる景賢、式賢の兄弟間の対立に着目し、景賢の死、景賢の子の景基の元服、通字の問題、「荒序」をめぐる相論などの具体的な内容を史料から辿ったものであった。発表後には会場から通字をめぐる問題について、根本氏が「景基」が「賢」の通字の原則から外れることから嫡流の認識が薄れた可能性を指摘されたこと

に対して、「景基」の名は「景賢」の「景」と「基政」の「基」によるものでより強いものではないかとの指摘などがなされた。冒頭に、音楽史における意義、音楽そのものへの具体的な影響を考察するとの説明があったが、いまだ何らかの意義や道筋を示す段階にはないように見受けられたので、今後の進展を待ちたい。

遠藤徹

◇研究発表Ⅲ-A (司会：内田順子)

彼の芸能からわが芸能へ—昭和悠紀の斎田芸能を事例に—

発表者：三島わかな

昭和期の大嘗祭において「一回性の芸能」として奉納された斎田芸能が、祭儀終了後に地域芸能へと転化し、現在まで継承されてきた経緯が検討された。とくに滋賀県野洲市三上の悠紀斎田芸能を対象に、大嘗祭関連芸能から地域芸能への文脈変化、戦前・戦後の社会変動下における継承の画期、担い手不足と「継承」への意気込みという直近の状況、近隣エリアへの芸能の伝播について整理された。また、三上以外の斎田芸能の伝承状況についても表によって整理されており、斎田芸能について個別事例を超えた検討が進められている点が印象的であった。なお、近代の斎田芸能については、大正天皇大嘗祭で悠紀斎田に選ばれた愛知県岡崎市六ツ美地区を対象に、「民俗芸能」に求められた役割や現在までの伝承理由を論じた矢嶋正幸の先行研究(『日本民俗学』297、2019年)があり、本報告はそうした研究蓄積とも接続しうるものとして意義深いものである。

内田順子

徳之島の芸能伝承における映像の活用

発表者：福岡正太

本報告は、文化財行政の変化と地域社会の課題を背景に、徳之島の芸能伝承における映像活用の可能性を検討したものである。国立民族学博物館と徳之島3町の協働による映像記録・展示プロジェクトを事例に、映像が単なる記録にとどまらず、当該地域の人びとにとって集落間の比較や相互理解を促す媒介として機能する点が示された。とくに、島内で上映会を重ね、映っている人や過去の実演を手がかりとして、人びとが自らの芸能を振り返る過程が、集落の記憶を喚起し、対話を生む契機となっていることが具体的に論じられた。研究機関と地域社会の協働による伝承のあり方を具体的に示している点も注目される。研究機関や研究者のもとに残されている映像や音声資料の公開と活用をめぐる課題に対し、ひとつの応答を与える内容であった。

内田順子

御座楽楽器「長線」に関する考察

—ライブツィヒ大学楽器博物館所蔵「Koo」を交えて—

発表者：遠藤美奈

国内外の文献資料・図像資料・楽器資料を精緻に突き合わせ、琉球の御座楽楽器のひとつである「長線」について、その歴史的 position と形態的特質を再構成した報告である。とりわけ、ライブツィヒ大学楽器博物館所蔵の「Koo」が、無量壽寺に伝えられた「長線」の絵柄と同一である点に着目し、両者を横断的に結びつけた点は、「長線」研究を統合的に捉え直す契機を与えるものであった。また、御座楽楽器の復元製作に携わった関係者の言葉を紹介しつつ、実物資料に即した議論を展開したことで、楽器製作に用いられた素材や漆工芸技術、楽器の制作環境や使用環境といった社会・文化的背景へと考察を開いた。今後、可能であれば、楽器の非破壊調査を通じて、現存する楽器を損なうことなく内部構造や製作技法を明らかにすることで、「長線」という御座楽楽器の歴史的・文化的意義が、より立体的に示されると考えられる。

内田順子

◇研究発表Ⅲ-B (司会：濱崎友絵)

ツィンパロムはいかにしてジプシー楽団の構成楽器となったのか

発表者：横井雅子

本報告は、18世紀半ばのハンガリーにおけるジプシー楽団成立を起点としつつ、中世期からのツィンパロムの使用状況や社会的 position づけにも遡り、同楽器がロマ楽団と結びついていく背景と過程を先行研究および史資料に基づいて検討したものである。ツィンパロムが当初からジプシー楽団の構成楽器であったとする単線理解を相対化させつつ、時代、社会階層、地域ごとの複層的な音楽実践を踏まえて展開される議論は、ハンガリーにおけるロマ音楽像形成のみならず、同国音楽史全体を再考する上でも示唆に富むものであった。フロアからは、有力貴族の楽団からツィンパロムの姿が消えた理由や、当時ロマによる使用が制限されていた楽器の有無、中世期における異なる社会階層(貴族、下級貴族、農民等)での演奏レパートリーの共有状況について等、社会背景や音楽実践に関わる質問が寄せられ、活発な質疑応答がおこなわれた。

濱崎友絵

民謡歌手に“なる”

—現代トルコ都市におけるメディア利用と

民謡歌手の形成過程—

発表者：米山知子

近年、「民謡」をデジタル時代のメディア環境の中で再編される音楽実践として捉えようとする研究動向がある。本報告はこの系譜の中で、一人のトルコ民謡歌手を対象に、ライブヒストリー的手法を用いてそのキャリア形成過程を描き出す

うとする事例研究である。アレヴィーの宗教儀礼や大学教育等を通じた音楽的背景を基盤にしつつ、デジタルプラットフォーム上での数値評価や、オンライン/オフライン双方の人間関係の交錯の中で「トルコ民謡歌手」として自己定位していく過程は、デジタルネイティブ世代の民謡実践の一側面を具体的に示すものとして興味深い。一方、インフォーマントの語りそのものの精査や音楽実践に即した分析等についてはさらなる検討の余地があり、今後の研究の進展が待たれる。フロアからは、アレヴィーの人々からの反応の有無や、視覚的演出やキャラクター形成への意識、民謡の地域様式の習得や差異化の方法をめぐる質問が寄せられた。

濱崎友絵

アレヴィー儀礼音楽におけるメルスイエと女性の声

—悲嘆・連帯・抵抗の実践—

発表者：鈴木麻菜美

本報告ではまず、トルコにおける宗教的マイノリティであるアレヴィーの儀礼音楽メルスイエを対象に、そこに現れる「女性の声」の宗教的、社会的意義が、伝統的な悲嘆としての女性像[ファトマ像]から、抵抗する女性像[ゼイネブ像]へと変化してきたのではないかと仮説が提示された。発表では詳細な関連事項の紹介がなされた一方、当該仮説を裏づける具体的な論証が十分に示されたとは言い難かった。フロアからは女性が公共空間で訴える主体へと移行する社会的背景や、その発信が女性への連帯の呼びかけなのか男性社会への批判なのかを問う質問が寄せられた。また、本発表の仮説に対して、現在のアレヴィー社会においてファトマ像は男女の平等性を象徴する存在でもあり、単に「泣く母/女性像」として限定してよいのか、ゼイネブ像への移行と論じて良いかどうかの質問・指摘がなされた。これに対し発表者からは今後さらに検討していく旨の回答があった。

濱崎友絵

◇研究発表Ⅲ-C (司会：小塩さとみ)

学校が担う「よさこい文化」の可能性

—保育者養成校の取り組みから—

発表者：山本華子(代表)・有村さやか(非会員)・

武山美子(非会員)・吉川幸子(非会員)

発表者らは、「よさこい」と名付けられた音楽、祭り、踊りなどを総称して「よさこい文化」とし、勤務校の小田原短期大学において、2023年度から授業に「よさこい文化」を導入し、地域の「よさこい系」祭りである「ODAWARA えっさホイおどり」に参加したり、独自の衣装、楽曲、振り付け、よさこい旗を創作したりなどの活動を展開してきた。今回の発表は、2023年度から2025年度の同短期大学の「よさこい文

化」活動の展開や成果を紹介し、学校で創出された「よさこい文化」の特徴や意義を考察するものであった。

同短期大学の「よさこい文化」に関わる取り組みの特徴として挙げられたこととして、「学長裁量経費」による大学の資金援助、「よさこい係」の設置による教職員からのサポート、「よさこい係」を通じた外部専門家からの協力などがある。独自の衣装、楽曲、振り付け、よさこい旗の創作は、学生と大学組織、教職員の共同活動によって実現している。

さらに、「学校」を拠点として、「よさこい文化」活動に参加した学生を対象にしたフォーカスグループインタビュー調査より報告があった。それによると、「よさこい文化」活動に学校を通じて参加することにより、学生の意識は環境に左右される「外部依存型」から、自立的な「自己成長型」へ移行し、内的な自己肯定感を持つことで達成感がより深まるという。さらに、演舞曲の歌詞に学校生活を特徴付ける言葉を挿入したことで学校のオリジナリティが表出され、学生の大学への帰属意識の芽生えが示唆されたという。「学校」を拠点とした「よさこい文化」活動ならではの特徴が明らかとなった結果であった。全国的に「よさこい系」祭りへ参加する大学生チームは、ほとんどと言っていいほど学生が中心となる活動である中で、今回の「学校」が中心となった活動についての発表は、大変興味深いものだった。同短期大学では、今後「よさこい文化」活動を学校主体から学生主体へ移行させようとしているとのことである。

質疑応答では、この移行に関する今後の活動の見通し、また、これまでの実際の経費などについて、質問があがった。今回の研究対象者は保育者養成校の学生であり、学校で「よさこい文化」に取り組んだ学生が、数年後には保育者となって、園児たちに地域の芸能・文化を伝承している姿が想像される。学生のみならず卒業生への活動調査を実施するなど、今後の研究の進展に期待したい。

壽美玲子

◇第42回田邊尚雄賞授賞式・田邊尚雄賞授賞祝賀茶話会

第42回田邊尚雄賞の授賞対象は、柴佳世乃氏の『仏教儀礼の音曲とことば—中世の〈声〉を聴く—』と山田淳平氏の『近世の楽人集団と雅楽文化』の2件となった。授賞式は大講義室で行われ、司会の近藤静乃理事がまず賞の概要を説明した。授賞理由等は、田邊賞選考委員会委員長海野のみ氏が所用で欠席のため、大会実行委員長の高瀬澄子氏が代読する形で行われた。その選考過程・授賞理由は、会報第124号2~3頁を参照されたい。

授賞理由に次いで、今回の授賞が2作となった経緯について、いずれもオリジナルな視点、精緻な分析と論理の構築、筆致の素晴らしさなどを擁し、甲乙つけがたいことが早くから認められていたと説明された。さらに両氏は日本中世文学、

日本史など音楽学の隣接領域の研究者であり、また柴氏は長年の研究を礎とし、山田氏は若手研究者という違いから、2作が音楽研究に力強く複眼的な視点を提供し、そして様々なキャリアをもつ本学会員あるいは研究者を目指す学生にとって大きな励みとなる、という点が強調された。

賞状等の授与は、所用で欠席の早稲田みな子会長に代わり、小塩さとみ副会長が行い、次いで受賞者の言葉が語られた。

柴氏は、「読経道」を長年研究され、その音曲復元を目指す過程で巡り会えたのが澄憲作『如意輪講式』であり、著作の半量ほどをこの論述に割いている。冒頭では本講式の本尊の如意輪観音像について説明がなされ、最後に、音曲と言葉の関係の解明、失われた読経音曲の復元が今後の課題との旨が語られた。大会前の10月25日、柴氏の解説と近藤静乃氏の協力により上演された国立劇場声明公演「如意輪講式」は、まさに隣接領域との協働の成果の一端を示すものであろう。

山田氏の研究は、近世の楽人集団を対象とする数少ない研究ではあるが、歴史学では1990年代以降より身分論として芸能者などが注視されるようになったという。今後は史料を収集し、読み解き、音楽と音楽を取り巻く人々の営みを実証し、音楽学への貢献ができれば幸いと力強く締め括った。著作には本学会の支部や機関誌での山田氏の研究成果が反映され、授賞式の前には戦後の芸能史に関する研究発表をされるなど、歴史学を基盤とする山田氏の本学会での活躍はめざましい。今後の研究のさらなる進展が期待される。

授賞式後は会場を大講義室から302教室に移し、授賞祝賀会は祝賀茶話会として、和やかでくつろいだ雰囲気の中で行われた。司会は高瀬大会実行委員長、乾杯の音頭は金城厚氏が担った。祝賀スピーチは、柴氏へは近藤氏、山田氏へは遠藤徹氏がされ、両氏の研究への真摯な姿勢が語られた。

澤田篤子

第2日(11月30日)

◇研究発表IV-A(司会:高橋美樹)

戦前日本のラジオ放送における「民謡」

—町田嘉章の『回顧録』に焦点をあてて—

発表者:長谷川由依

発表に先立って題目の変更があった旨の報告があった。発表は町田嘉章による「俚謡放送の回顧」(『回顧録』:雑誌『民謡研究』に所収)を手がかりにして、1925年から29年にわたる東京放送局(JOAK)での民謡放送の内容を明らかにするものであった。配付資料に基づいて、「回顧録」の記述から民謡の番組が大きく7種類に分けられることが説明された。結果として、番組の多様な構成や制作背景を踏まえて、民謡放送には「記録的機能」と「娯乐的機能」の二面性があるこ

とが指摘された。他方で、用語に関して、新民謡、新小唄、新俚謡などの区別の問題や、音源が生演奏かレコード使用かの技術的側面での区別など、今後の資料調査の必要性が示された。質疑応答では、国会図書館所蔵の『日刊ラジオ新聞』や、『NHK 番組確定表』の活用、町田の日記やフィールドワークによる録音の使用可能性など、さらなる調査の広がり提示された。

安原道子

帝國的連環の視座からみた植民地期朝鮮・台湾のレコード産業と歌謡

発表者：山内文登

山内氏の発表は、従来は主として個別に研究されてきた植民地朝鮮と台湾のレコード産業を比較の視点から捉え、特に歌謡曲に焦点を当てて分析するものである。理論的枠組みとして提示された「帝國的連環」の概念を通じ、両地域の独自性と相関関係に加え、日本内地の動向やアジアを含む世界的潮流との複雑な関係性が示された。発表の前半では、1945年までのレコード産業史を時期区分したうえで、各時期における西洋および東アジアのレコード工業の成立と展開が概観された。後半では、朝鮮および台湾で成立した流行歌の音源を実際に再生しながら、その内容や音楽的特徴について具体的な説明が行われた。

質疑応答では、録音設備や録音技術といった「内地から外地へ」の移転の問題や、「帝國的連環」の概念を中国大陸、さらには中国を介したヨーロッパのレーベルとの関係にまで拡張して捉える可能性について質問が寄せられ、レコード研究に新たな視座を提示する意義深い時間となった。

劉麟玉

民族音楽とラジオ FM 放送

発表者：丸山洋司

丸山氏の発表は、NHK-FM で1965年から85年に放送された番組『世界の民族音楽』を対象とし、その番組内容を考察することによって、日本における「民族音楽」という用語の紹介のされ方とそのイメージ形成を考察するものであった。番組で小泉文夫が主として解説を担当していたことを踏まえて、1971年におけるタイトルの変更を中心に説明がなされた。「民俗音楽」から「民族音楽」へと変更された点について、当時の音楽学の研究状況、番組内容の変化、ワールドミュージックという言葉の登場による用語のイメージ変化などの観点から考察が行われた。質疑では、番組が99年まで存続したこと、民族音楽からワールドミュージックへの変化の捉え方、制作現場の状況などの質問があった。FM 放送というメディアの内容を通じて、「民俗音楽」から「民族音楽」へと用語が変化する過程とその学術的意味を解明する一つの道筋が示された意義深い発表であった。

安原道子

日本における「ワールドミュージック」を考える —岡崎ワールドミュージックフェスタを通して—

発表者：馬場雄司

馬場氏は発表冒頭で、「ワールドミュージック」という語の成立と日本における受容を概観し、1980年代後半以降に広く流通して研究成果やイベントを生んだ一方、民族音楽やロックなど分野によってイメージが異なり、概念的に曖昧なまま用いられてきたことを指摘した。本発表の中心である「岡崎ワールドミュージックフェスタ」は、「食と音楽」を理念に2014年に京都で始まったイベントで、五大陸とつながる街づくりを目的としている。2022年以降は、月例企画「ワールドミュージックを聴く会」などの広報的活動も展開されている。登壇演奏家の事例として、アジアの伝統楽器と同様の距離感で日本の和楽器に向き合う奏者や、アイヌのムックリ演奏を通して身体性や音楽の根源を見つめ直す実践が紹介された。とりわけ前者は、日本の伝統音楽がワールドミュージックとして捉えられている点で、その定義を再考させる内容であった。

質疑では、岡崎地域の京都市内における位置づけやフェスタとの関係性、出演者を日本人に限定している意図などについて質問が寄せられた。

劉麟玉

◇研究発表IV-B (司会：土田牧子)

近代以降歌舞伎『芦屋道満大内鑑』四段目幕明の音楽演出

—「隣り柿の木」をめぐる—

発表者：前島美保

前島美保氏の発表は、黒御簾音楽のレパートリーである在郷唄(隣り柿の木)について、台帳などの資料をもとに、主としてその詞章の変遷を明らかにするものであった。義太夫狂言『芦屋道満大内鑑』の四段目冒頭との関連はすでに指摘のあるところだが、当該箇所の変遷をたどることで、歌舞伎に移入された当初は義太夫節で幕を開けていたのが、次第に義太夫節の詞章をとり入れた黒御簾音楽の唄、すなわち在郷唄(隣り柿の木)が使われるようになる様相は注目に値する。さらに近代以降は同じ『芦屋道満〜』の幕明でも使われる曲に変遷があり、現行では(仕事片寄せ)という在郷唄で定型化していることも興味を引く。

質疑応答の中では、黒御簾音楽のレパートリーは数多く、それを一般化して述べることはできないが、その中に義太夫狂言の成熟とともに生成されていった唄があることの重要性が改めて確認された。江戸と上方で、いずれも義太夫節の詞章との共通点を残しながら、詞章や旋律の異なる(隣り柿の木)が生成された経緯、その使用例や用途の拡大など、今後の研究の広がりも感じさせる発表であった。

土田牧子

『洋々集』における中ノリ—はずむ拍子、進む位—

発表者：荒野愛子

荒野愛子氏の発表は、江戸末期の地謡方・教授者・理論家の梅若幸次郎満寿による謡の理論書『洋々集』に記された「中ノリ」の解釈について、現代との違いを示しつつ、その説明の指し示す謡の特徴を「はずむ拍子」と「進む位」をキーワードに読み解く研究であった。現在の中ノリは、八拍子に16文字を2音ずつ当てはめていく謡い方を基本とするが、荒野氏は『洋々集』ではそれとは異なる説明が付されている点に注目し、そこに「中ノリ」の性格を捉える有効性を見出した。明確な理論化がなされる以前の記述を現在の整理することには慎重に臨む必要もあろうが、荒野氏はそれを「地拍子上、中ノリ謡になるもの」、「小段構成の中で変化をつけるもの」に二分し、後者に見られる上記のキーワードに着目して分析を試みた。

フロアからは、平家に「ハツミ」という旋律型があることを踏まえ、中世語り物の枠組みの中で謡を位置づけられるのではないかという助言や、能の「位」という用語が多義性を持つものであることから『洋々集』での用法の確認などが寄せられた。

土田牧子

江戸期宿場町の音楽文化を再考する

一文学・絵画史料をめぐって—

発表者：青木慧

江戸時代の品川宿の様相を踏まえ、浮世絵や文学(黄表紙などの絵草紙)における描出から、品川という宿場町でどのような音楽が演奏されていたのか、また享受されていたのか、という点に着目するものである。宿場町の文化や音楽を解明しようという着眼点はおもしろく、興味をそそられるが、いかんせん掘って立つ情報量が限られていて、なかなか期待するような実態把握は難しい。その中で、品川では新内節が好まれていたらしいなど、興味深い事例も紹介された。今後、研究としての信頼度をより増していくためには、事例を紹介するだけでなく、例えば品川を描いた浮世絵が何点あって、そこに楽器を描いたものが何点あるのかなど、史料の総数とその中の割合といったデータの全体像を示すことも有効だろう。フロアからは、浮世絵や文学にはある種のパターン(型)があることに着目すべきという重要な指摘があった。

土田牧子

「収容所」という異空間のサウンドスケープ

一極限下の文化創造活動—

発表者：森谷理紗

森谷理紗氏の発表は、南方戦線の収容所における音楽や演芸活動について、戦後の日本人捕虜収容所と日本占領下の連合軍捕虜収容所との事例を紹介し、両者の比較から収容所における文化活動の意義について検討するものであった。発表

の中心を成した戦後のシンガポールのリババレー収容所の事例が、ずばぬけておもしろい。同収容所の日本軍捕虜たちが劇場を作り、3〜4本立ての演劇を享受していた実態は目を引く。

収容所の文化活動については多方面で研究の進むところであるが、森谷氏は早くからシベリアの実態に着目して研究を進め、本研究もその延長線上にあると言える。ただ、「収容所における芸術活動は、生存、結束、そして長期的な記憶の再構築を支える重要な文化実践として機能していた」というように、複数の収容所を一括りに結論づけてしまうと、個々の特性が却って見えなくなってもったいないように感じた。筆者の個人的関心に偏るようではあるが、上演演目や携わった人々の追跡もぜひ望みたい。紙の調達についての質問があったが、処方箋や経理用紙の裏を使ったなど、細かいエピソードも興味深かった。

土田牧子

◇研究発表IV-C(司会：マツト・ギラン)

能管の原材料と製作技術に関する調査報告

発表者：前原恵美(代表) 森田都紀・亀川徹(非会員)・小林慧人(非会員) 倉島玲央(非会員)

本発表は代表者の前原氏をはじめ、5名による共同発表で、能管の製作者・原材料・製作技術の歴史と現在を明らかにすることを目的としていた。文献資料や製作者とのインタビューによる調査、音響データの分析など、さまざまな研究方法を取り入れた報告として、楽器学の新しい可能性を提案したものであった。

歴史の考察では、森田氏が『明和年間徳川家書上 七十種銘管録』などを紹介し、歴史的な笛の原材料と製作技術について解説した。結論のなかで、時代ごとに素材(メダケ、ヤダケ)、竹の処理(煤竹など)、喉の加工などに多様性があったとする指摘は興味深かった。

前原氏は本調査で対象とした能管を紹介し、それぞれのCTスキャン画像をもとに内径や構造の違いについて考察した。また、現在活躍している能管製作者らの言説を取り上げ、各人の製作技術や製作に対する考え方を比較・考察した。

「能管の音響分析」(亀川氏)では、素材の異なる能管を録音し、それぞれの周波数特性を比較する報告が行われた。「呂」や「干」といった音階ごとの倍音レベルの比較、「ひしぎ」の倍音レベルの比較では、銘管と樹脂管の間に周波数特性の違いは多少認められたものの、素材による音の差異について確定的な結論を導くには、さらなる考察が必要かもしれない。

「能管に使用する木材は音に影響を与えるのか」(倉島氏)では、白竹、煤竹に含まれる成分や、各素材の音の違いについて考察が行われた。現代の演奏者が持つ煤竹への愛着心についても取り上げられた。

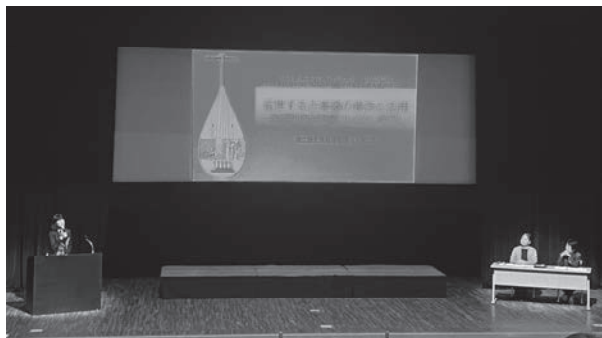
「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」では、小林氏が森林学の視点から、現在の日本の竹の種類について紹介し、煤竹が入手困難となっている現状をふまえ、能管制作に使用可能な素材についての提案がなされた。

会場からは、「能、歌舞伎、長唄で使われている能管は違うのか」「能管に使用されている漆はどのように音を影響しているのか」といった質問が寄せられ、セッション終了後も活発な議論が続いた。能管の構造、音響、素材、製作技術について多岐にわたって検討された有意義な共同発表であった。

マット・ギラン

◇公開講演会、公開演奏会

今次大会の公開講演会は「伝世する古楽器の保存と活用—紀州徳川家伝来楽器コレクションを例に—」と題し、基調報告は国立歴史民俗博物館・日高薫さんのご講演であった。美術のご専門の立場からのお話であったが、歴博で行われた音楽学者との共同作業による楽器展示の試みについて、詳しくご報告いただいた。本来音を奏でる楽器を保存することと、公開展示することとの両立の難しさについて、現場での工夫などのご経験を詳しく伺うことができたことはたいへん有益であった。とりわけ、非破壊検査の装置や技術の進展に依拠するところが大きいとのことだが、そうした科学技術の発展と歩調を合わせるように、保存を優先しながら、音楽的解明についても一步一步慎重に調査を前進させているとのこと説明に、大きな学びが得られた。



公開演奏会では、琉球国が中国からの冊封使を迎えて行われる冊封儀礼の宴席で演奏されたという「北宮十二頌曲」が紹介された。北宮とは、首里城正殿の前庭・御庭(うなー)の北側に面した(中国皇帝の使者が南面して座する)建物の中で、ここで行われる「御礼式」で、正使・副使が新たな琉球国王と会食する際に奏される一連のBGM音楽が「北宮十二頌曲」である。

この12曲は、個々の楽曲そのものは琉球古典音楽のレパートリーとしてよく演奏される曲だが、歌詞が数十年に一度の冊封宴でしか演奏されない独自の歌詞で、中国皇帝、使者、琉球国王を讃え、使者の帰路の航海安寧を言祝ぐ内容が歌わ

れるという大変珍しいものである。現在は歌われる機会がない歌詞なので、今回、発掘史料をもとに再現演奏して下さったことはとても得がたい貴重な機会であった。また、大曲も含めて一度に12曲もの連続演奏というプログラムは、演奏家にとっても大胆な試みであったと想像する。若手の挑戦に拍手を送りたい。



さらに、三線4挺に胡弓1挺という編成は史料にもとづく再現だが、このような編成は、現在の沖縄では聴く機会がめったにない。往時のアンサンブルの響きを味わうことができ、学会の企画に相応しい貴重な鑑賞体験となった。

金城厚

第25回通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2025年10月12日(日)に対面およびweb会議システムZoomを用いて第27回通常理事会が、また11月30日(日)に沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス奏楽堂において第14回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細は、後掲の第14回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、前回理事会(2025年4月13日)以降に申し込みのあった正会員10名の入会が正式に承認されました。

2) 個人情報保護方針制定について

理事会において、東洋音楽学会個人情報保護方針が制定されました。詳しくは本号の「情報委員会からのお知らせ」をご覧ください。

3) 日本学術振興会賞への学会推薦について

本号の関連記事をご覧ください。

日本学術振興会賞の学会推薦について

2025年10月12日(日)に行われた第27回通常理事会において、令和8年度日本学術振興会賞の学会推薦に山田淳平さんが選出されました。日本学術振興会賞は、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を早い段階から顕彰しその研究意欲を高め研究の発展を支援していくことを目的に、平成16年度に創設された賞です。対象分野は人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野で、博士の学位を有する45歳未満が対象です。当該大学長、所属する学会長からの推薦をうけて、日本学術振興会が設置した審査会において25名程度が選考されます。本学会では、前年度の田邊尚雄賞受賞者(原則として単著)で、日本学術振興会賞の推薦条件を満たし、本学会での活動実績のある者を、理事会議決を経て推薦することにしています。

第1回定例研究会レポート

第1回定例研究会(東日本地区担当)

対面開催

日時: 2025年9月27日(土) 14:00-17:00

場所: 国際基督教大学D館オーディトリウム

内容: 研究発表/演奏/特別企画

共催: 国際基督教大学、一節切尺八(大森宗勲没400周年祭)

実行委員会

○第一部 研究発表

1. 一節切の世界

相良保之(古典尺八研究・明暗真法流尺八演奏家)

要旨

一節切には五調子と呼ばれる5種の音階が用いられる。五行思想に基づき、双調は春、黄鐘調は夏、尙越調は土用、平調は秋、盤渉調は冬、このように配当され、大森宗勲(1570-1625)は約80曲の五調子の曲を作った。永正九(1512)年成立の『體源鈔』には、筒音をそれぞれ平調・双調・黄鐘・盤渉・尙越とする一節切の概略図が示され、〇〇調切と呼ばれるこの5種の管(厳密には、黄鐘切は2種示される)はそれぞれ〇〇調を吹奏できると考えられている。相良氏は、『體源鈔』の図に基づいた5種の〇〇調切、「宗勲」と金泥で書かれる『凝雲』銘の黄鐘調切のレプリカ、これらを製作した。

発表では、まず、5種の〇〇調切によってそれぞれの調子

で『荒城の月』を吹き比べ、黄鐘調切の『凝雲』のレプリカを用いて五調子(尙越調・平調・黄鐘調・盤渉調・双調)それぞれの曲である『踊り念佛』『上之海』『コロビ手』『地主之桜』『紹窓手』を一管で吹奏できることを実演した。

傍聴記

『體源鈔』の〇〇調切の図に明示される寸法は、歌口及び菅尻に最も近い指孔の位置のみであり、この2孔の位置も孔の中心か上端か下端かは明記されない。従って、厳密に考えれば、相良氏の製作には推定が含まれる。『凝雲』の音律についても、これ一管のみでは黄鐘調切の標準的な音律とはみなせない。ただし、相良氏が黄鐘調切一管で五調子を吹奏可能なことを実証したことは、吹奏法による補正を加えたとはいえ、大森宗勲が製作した「五調子の尺八」が黄鐘調切一管で五調子の全てを吹奏できる一節切であった可能性を示唆する。そして、これは、後述のとおり、マット・ギラン氏が提唱する説でもある。一方、音楽としての鑑賞という観点から考えると、黄鐘調切のみでは音域の制限があるため、例えば、尙越調(土用)の曲では尙越調切による高音域、平調(秋)の曲では平調切による低音域、それぞれを吹奏できないという欠点があり、実際の演奏では専用の切か黄鐘調切のいずれを選択するかという判断が必要になる。

いずれにしても、相良氏によるこれまでの一節切の演奏・製作・研究・普及活動は、マット・ギラン氏が称賛するとおり、「現代における一節切の中興の祖」と呼ばれるに相応しいものであり、演奏者や研究者だけでなく宗勲も喜んでいることであろう。氏の登壇は本研究会になくはならないものであった。

2. 能役者の吹奏した一節切

高桑いつみ(独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所)要旨

2017年、高桑氏は、静岡県森町教育委員会からの要請を契機として野川美穂子氏とともに、現存する一節切の古管22管についての調査報告(「調査報告・現存する一節切—正倉院と虚無僧尺八のはざままで—」『芸能の科学』)を行った。

一節切は能・狂言にも取り入れられており、座敷謡では音取で吹奏され(『申楽談義』『音曲口伝』)、田楽能では『尺八の能』も上演され(『申楽談義』『文安田楽能記』『閑吟集』)、狂言『楽阿弥』は尺八(一節切)吹きの楽阿弥を題材とする。また、『海道下り』『下り端』のように、同一曲を能管と一節切の両方で吹奏した例もあり、能管のみで奏する森田流一管曲には尙越音取・平調音取・双調音取・盤渉音取・五調子音取などの調子名を冠した音取が伝承される。このように、室町期・江戸期の能役者は、息を、強く入れる能管と弱く入れ

一節切を吹き分け、一節切と能管には様々な関連があった。

傍聴記

2017年の高桑氏による調査報告には所蔵地や一節切を楽器として捉えた際に採寸すべき項目が示されており、52管を測定した加藤いつみ氏による2022年度の博士學位論文『一節切尺八の研究』にも寄与した。81歳での学位取得は中日新聞にも取り上げられ、多くの人々に勇気と感動を与えた。このような意味で、高桑氏の2017年の業績には学術以外の分野にも間接的な社会貢献があったと称賛できる。

能と一節切の繋がりに関し、天福元年に著された『教訓抄』巻第八に「短笛ハ尺八云。……今ハ目闇法師、猿樂吹之。」とあり、能役者は遅くとも1233年までには琵琶法師とともに一節切を吹奏する人々として認知されていた。本発表は、1233年当時の「猿樂吹之。」との記述も、座敷のみというように場所を限定してのものであったのか、音取のみであったのか、このような新たな疑問を想起させ、能と一節切の関係に未知の史実が残っていることを示唆する。

3. 一節切尺八の調子について

一林羅山の「餘音尺八記」の一考察

マツト・ギラン (国際基督教大学)

要旨

本件は論文として発表する前の口頭発表であるため、詳細を示さずに要点を箇条書きする。

- ・大森宗勲が後陽成天皇の詔によって製作した五調子の尺八は黄鐘切一管で五調子の全てを吹奏できた可能性がある
- ・一節切の教則本である『宗左流尺八手数并唱歌目録』と能の理論書(『塵芥抄』など)には、五行に関連する事項など、共通する記述が少なくとも7項目ある
- ・一節切の譜面記号(ホ・ウ・エ・ヤ・リ)は五行と関係する可能性があり、これは日本で作られた理論であると考えられる
- ・『宗左流尺八手数并唱歌目録』、林羅山の『餘音尺八記』、『六韜』、『武経要略』などの兵法書、これらには兵法を五声や五調子から読み解く記述がある

傍聴記

主に『宗左流尺八手数并唱歌目録』などの一節切の教則本と五行思想との関係に着目した研究である。『日本書紀』継体天皇七年条には百濟による五経博士の貢上が記され、五経には易・陰陽・五行に関する記述が含まれるため、五行思想は遅くとも513年には伝来したと考えられる。また、飛鳥期には『五行大義』が伝来した蓋然性が高く、冠位十二階も『五行大義』の記述に基づいて定められたことが指摘され、これ

は「五行思想の日本化」でもある。ギラン氏の発表は、一節切の教則本や能の理論書においても「五行思想の日本化」がなされたことを指摘するものでもあり、研究の着実な進展を期待したい。

また、黄鐘切一管で五調子の全てを吹奏するには十二律中の九律の音高を正確に吹奏する必要がある。その実現にはクロスフィンガリングも必要となるが、雅楽尺八の牙尺八ではクロスフィンガリングを用いる律であっても[聴感の範囲で]正確な音高を実現しているため、孔位置が精巧に穿たれた黄鐘切が存在した可能性を否定できない。

○第二部 一節切演奏

泉武夫、大山貴善、加藤いつみ、マツト・ギラン、相良保之、島津義秀、弾真空、ニック・ベランド、各氏による一節切の独奏で、宗勲への献奏の気持ちが伝わった。8名中2名が日本に移住した西洋人であることは、一節切や尺八の国際化の象徴であり、日本人として感謝に堪えない。マツト・ギラン氏は、パンフレットの裏表紙の写真も担当し、宗勲の墓を礎石から見上げるように画面いっぱいに撮ることで、宗勲の偉大さを表現し、尊敬の念の深さを伝えた。演奏のほとんどは古典曲であったが、相良氏は会場への敬意を表して讚美歌を吹奏し、これも国際化の可能性の示唆と言える。

○第三部 特別企画「一節切尺八 日本中世の響」

小濱明人氏による一節切・尺八などの演奏、狂言師河野祐紀氏による現代語訳での朗読、朗読にまつわる静止画、これらから構成される朗読劇。『東海道英名画伝』「鞠子」では、一節切を愛した連歌師、柴屋寺の宗長の逸話が『初手』の演奏とともに朗読された。『宗長日記』「紹崇のこと」では、一節切の名人紹崇が伊勢の二見の浦で入水した下りが、二見の浦の静止画と彼の手である『紹窓手』とともに朗唱された。会場の出入り口が開いていたためにカラスの鳴き声が小さいながらも頻りに聞こえたことは、自然界の営みと融合した偶然の演出であった。『楽阿弥』では、『窺(一)』『窺(二)』『波間』『ニタリ』の吹奏とともに、狂言『楽阿弥』が朗読され、第一部での高桑氏による発表の補足にもなった。僧である楽阿弥と一節切を掛けた「僧正(双調)切」の台詞を聞けなかったことだけは残念であったが、全体としてシリアスに進行する演出にユーモアを混入させないための措置と理解する。

本研究会全体として、第一部ではワクワクするような多くの新見聞を得られ、第二部と第三部では一節切の演奏を芸術として堪能でき、興味のある人々にとっては満足感が高く、宗勲の400年祭という趣旨からも最高の供養になったように思える。これもひとえに実行委員会の皆さまの念入りな準備

と登壇者の真心によるものと考え、謝意を伝えたい。

(明土真也)

第2回定例研究会レポート

第2回定例研究会(西日本地区担当)

対面とオンラインのハイブリッド開催

日時: 2025年10月26日(土) 13:00~16:00

場所: 国立民族学博物館 第7セミナー室

司会: 福岡正太

内容: 博士論文発表1件と映像上映

博士論文発表

1. 肥前地域の鉦浮立の研究

——現代における民俗音楽の伝承

古澤瑞希(総合研究大学院大学)

要旨

本研究の対象である北志田の浮立は、4種類の音高の異なる鉦(かね)と笛、2種類の太鼓によって演奏されるアンサンブルを主とする芸能である。佐賀県嬉野市塩田町大字久間(くま)の北志田地区の住民によって伝承されてきた。2017年度の冬に、地区内唯一の笛奏者が40代で逝去したため、上演を行うことが難しくなったため、この芸能は2017年11月3日を最後に、祭りやイベントにおけるパフォーマンスが行われていない。また、コロナ禍の影響により鉦・太鼓などの打楽器類の練習は開催されなくなり、小学生を対象とした屋外における夏休みの笛の練習のみが行われているという状況にある。

北志田の浮立が再開できない直接的な原因は笛奏者の逝去とコロナ禍の影響という2つの事由にあるといえる。しかし、かつて複数いた笛奏者が1人となっていたことは、伝承システムの不全という構造的な問題の可能性を示している。本研究では、伝承システムが機能していない現場において研究者自らが研究対象の音楽を学ぶことによって、担い手の変遷や、音楽構造や行事の構成といった視点から、北志田の浮立が抱える伝承の課題を明らかにした。

民俗音楽の伝承には、実際にパフォーマンスの場で演奏を行うなかで培う、臨機応変さや柔軟性が大きくかかわっている。しかし、北志田の浮立は近年、奉納やイベントにおける演奏が行われておらず、担い手たちが実際の場で経験を積む機会がないため、アンサンブルが成り立たなくなっている。また、長期間継続して関わる伝承者がおらず、アンサンブル全体を把握して指導できる人物も不在である。これらのことから、北志田の浮立は現在、「パフォーマンスの経験不足」

「伝承者の非持続性」「伝承システムの再構築の必要性」という3つの課題を抱えているといえる。今後は、持続的に関与することが可能な地区内部の指導者の育成や、学習段階に応じた楽譜、笛以外の楽器の練習体制づくりなど、伝承のありかたを担い手とともに考えていく必要がある。

傍聴記

古澤氏の博士論文は「北志田の浮立」が現状に至った過程と要因について、伝承システムの構造の問題に着目し明らかにすることを目的とする。博士論文では、現在に至るまでの伝承の経緯や、アンサンブル全体の構造・笛奏者間の旋律の差異など音楽的な分析、さらに浮立が奉納される場についての分析も行われたことが示されたが、本発表では特に伝承システムの変化と、それに伴い現在浮かび上がってきた問題が取り上げられた。

古澤氏は、「北志田の浮立」が現状に至った要因について、1970年代に北志田地区で創設された「子供浮立」をきっかけに三つの段階に分けて論を展開した。まず、①「子供浮立」が創設されたことによって浮立の担い手が青年団から子供へと変化した(当時の青年層である現在の60~70歳代が第1の空洞世代となる)。また、新参者が浮立を学び始める際、それ以前は鉦や太鼓を担ぐなどの周辺的な仕事から関わっていたのに対し、「子供浮立」の成立以降は楽器の奏法だけを習う「習いごと」のような存在になった。そして、②第1の空洞世代が意思決定層となった現在では、彼らが若いうちに浮立を経験できなかったことに加え、地区内唯一の笛奏者の死去や新型コロナウイルス感染症の影響によってパフォーマンスの機会が減少し、鉦や太鼓の奏法を知らない第2の空洞世代が発生しつつある。結果として、③パフォーマンスの機会が減少することによって北志田地区全体の浮立への関心が低下し、それがさらなるパフォーマンス機会の消失を生み出していると指摘された。

結論として、「北志田の浮立」はパフォーマンス経験の不足と、伝承者の非持続性、伝承システム全体の再構築の必要性という課題を抱えており、再開のためには、隣接地区など外部からの支援、パフォーマンスの再開、アンサンブルを理解するうえで重要な鍵となる鉦や太鼓の練習の重要性が指摘された。

質疑応答では、北志田地区の浮立の起源を地区の人々へ伝えることで伝承のモチベーションになるのではという指摘があった。これに対し古澤氏からは、現代社会に生きる人々、特に若い世代の人々には約200年前に始まった芸能の起源はなかなか心に響きにくい、という現状が語られた。北志田地区における古澤氏の今後の立ち位置についての質問に対しては、伝承のためにできることがあれば協力したいというこ

と、また研究者の役割の一つとして、楽器製作者など、地区外の人とのつながりを提供することも考えられるのではないかと回答があった。また、伝承が衰退する要因について、世代を通した伝承構造に注目し、分析した点が古澤氏の論文の重要な新たな視点であるという指摘もなされた。

報告者の印象としては、以前、新参者は楽器を担ぐなど周回の参加から徐々に全参加をすることで浮立を学んでいたと考えられるのに対し、子供浮立の成立以降は、楽器の習得が子供たちの一種の習い事のようになったという、伝承システムや浮立への関わり方の変化によって、それがかえって現在の問題につながっているという古澤氏の視点が非常に興味深く感じられた。(小島冨月)

映像上映

2. ジャワの影絵芝居、海を渡る

(福岡正太監修、国立民族学博物館製作、70分、2025)

傍聴記

国立民族学博物館では「移動する人々、心の交流」をテーマに、福岡正太氏の監修で「ジャワの影絵芝居、海を渡る」が制作された。この映像は、3組のジャワ人&日本人夫妻によるジャワの影絵芝居ワヤンの日本での活動を描いた映像民族誌である。ガムラン音楽や芸能に魅せられジャワに留学した日本人女性がジャワ人音楽家と出会い結婚し、その後ワヤンを日本語で上演するに至った人生の軌跡がインタビューと共に紹介されている。

福岡氏によれば、約25年前に民博で「越境する民族文化」をテーマに日本でのガムランの「受容」について展示&映像制作をしたが、現在の文化状況はもっと双方向的・創造的と捉えるべきではとの問題意識から、本映像は制作されたという。
★事例1：ローフィット・イブラヒム(ガムラン演奏家・ダラン)&佐々木宏美(ガムラン演奏家)、ハナジョスを主宰(大阪を拠点に活動)

二人は、幼児向けの人形劇を創意工夫する等、「日本社会や地域の人々に受け入れてもらう」努力をしつつ日本語ワヤンを開拓してきた。ランバンサリ(東京を拠点に活動するガムラン演奏団体)とも3回共演し、2023年6月に「スグリウォとスバリ〜猿になった兄弟」(東京、日暮里サニーホール)を上演。共演者から「ジャワでワヤンを見てもわからなかったことが分かってきた。」等の感想と共に、意見交換しつつ共に日本語ワヤンを創り上げる醍醐味も語られ、繋がりを深めつつワヤンの質も高めあう協働的な姿が見られた。

★事例2：ナンン・アナント・ウチャクソノ(ガムラン演奏家・ダラン)&西田有里(ガムラン演奏家)、マギカマメジカを主宰(大阪を拠点に活動)

高名なダランの祖父と共に海外公演経験も豊富なナンン氏

は、「日本の文化や伝統などを学び、インドネシアの芸術の価値を高めたい。」と語る。ダルマ・ブダヤ(大阪大学を拠点とするガムラン演奏団体)との共演による2024年3月のワヤン「シータ妃 大地への帰還」(大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ)では、「ジャワの文化を日本語に適応させていて、とても素晴らしかった。」との感想が寄せられた。

★事例3：「ムジカーザでガムラン2024」(東京)、3組の夫妻6人による公演

最後に、東京在住のスマヤント(ガムラン演奏家)&根津亜矢子(舞踊家)夫妻を含む3組の夫妻の活動を長年見守ってきた中村伸氏(日本ワヤン協会 会員)企画による公演(舞踊、ジャワ芸能、日本語ワヤン)のリハーサルが紹介された。

上映後の質疑応答では、日本語で演じる意義や映像の海外発信等について活発な意見交換がなされた。「ジャワと日本という2分法では捉えきれない相互性が大切」(福岡氏)な時代の潮流の中で、本映像は人が「移動」し「交流」することで新たに生まれる双方向的な文化の可能性を感じさせてくれた。

(川口明子)

これからの定例研究会予定

第3回定例研究会

2026年2月開催予定

場所：大阪大学中之島芸術センター

(詳細は<https://tog.a.la9.jp/regular.html>を参照)

第4回定例研究会

2026年3月7日14:00~17:00(予定)

オンラインによる開催

内容：卒論・修論発表

(詳細は<https://tog.a.la9.jp/regular.html>を参照)

第5回定例研究会

2026年3月22日14時~16時(予定)

場所：東京藝術大学 第1ホール

内容(仮)：UCLA スティーヴン・ロサ教授のレクチャーと同氏のラテン・ジャズ・バンドの演奏

日時：2026年3月22日(日) 時間未定

日本音楽学会と共催

情報委員会からのお知らせ

1. 今号(126号)より会報は原則としてメール配信に移行しました。今回、郵送で受け取った方で、メールでの受信が可能な方は、情報委員会 (togictmt@gmail.com) にメールアドレスをお知らせください。
2. 2025年秋の理事会で「(一社)東洋音楽学会 個人情報保護方針」が承認されました。本学会が皆様の個人情報を適切に管理するための方針を示したものです。以下に全文を掲載しますので、お読みください。

(一社)東洋音楽学会 個人情報保護方針

一般社団法人東洋音楽学会(以下、本学会)は、個人情報保護の重要性に鑑み、個人情報の保護に関する法令を遵守するとともに、事業の内容および規模を考慮した適切な個人情報の収集、利用および提供を定めた個人情報保護体制の構築と改善に取り組みます。

【個人情報の取得】個人情報の収集は、収集および使用の目的を明示した上でおこなうことを原則とします。個人情報への不正アクセス、個人情報の紛失、破壊、改ざんおよび漏えいなどに関して、予防措置を講ずると共に、万一の発生時には速やかな是正対策を実施します。

【利用目的】取得した個人情報は、定款に定められた本学会の目的を達成するために、紙媒体や電子媒体による会員への連絡、研究発表会および学術講演会等の開催、学会誌および学術図書の刊行、関連学協会との連絡および協力、研究の奨励および研究業績の表彰、研究および調査、会員名簿の作成、学会の運営に必要な事務手続きに利用します。

【個人情報の第三者への提供】下記の場合を除き、取得した個人情報を第三者に提供または開示しません。1.法令に基づく場合または正当な権限を有する裁判所その他政府機関より適法に開示を要求された場合。2.特定の目的のために本人から同意を得た場合。

【安全確保の措置】個人情報の適正な取扱いの確保に必要な措置を講じ、その措置について、継続的に見直し、改善を行います。業務の全部又は一部を外部に委託する場合など、個人情報を取り扱う従業者に対しては、契約等によりその安全性を担保し、必要かつ適切な監督を行います。

【個人情報の照会・訂正・削除】会員の個人情報の照会、訂正、削除については、下記の学会事務局を窓口とします。本学会では、業務の適正な遂行を妨げない限りにおいて、本人からの申し出により、個人情報を本人に開示します。その場合、本学会所定の方法によって本人確認を行います。本人に開示した個人情報に事実と異なる内容があった場合、本学会ではこれを直ちに修正します。また本人から個人情報の利用

停止の申し出があった場合には、直ちにその利用を停止します。

【サイト等のセキュリティについて】本学会では、個人情報の管理にあたり相当の注意を尽くしますが、インターネットや電子メールの性質上、個人情報の秘密性を完全に保証することはできません。この点に留意してウェブサイトおよび電子メールをご利用ください。

【各サービスの個人情報の取り扱いについて】本学会では、サービスに関するサイト、電子メールその他各種の案内等において、当該サービス等ごとに個人情報の利用目的、第三者への提供、セキュリティおよび問合せ先等、その個人情報の取り扱いについて個別に定める場合があります。「(一社)東洋音楽学会 個人情報保護方針」と異なる定めや特別な定めがあるときには、当該サービス等ごとに定めた個人情報の取り扱いに関する事項を優先して適用します。

【改定について】「(一社)東洋音楽学会 個人情報保護方針」は、関連する法令等の改正や本学会の方針の変更等により予告なく変更する場合があります。

【個人情報の管理に関する責任者】本学会における個人情報の管理に関する責任者は、会長とします。

一般社団法人 東洋音楽学会 事務局

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

TEL/FAX:03-3832-5152

E-mail: LEN03210@nifty.com

第43回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第43回田邊尚雄賞選考委員会では、新刊情報を広く収集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、著作物を出版される際は、選考委員会までお早めにお知らせ下さい。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象：2025年1月1日～12月31日の発行物

締め切り：2026年2月6日(金) 正午

記入事項：著者名、書名、発行年月日、発行所名

なお、論文の場合は、掲載誌名・巻次・編集者名・論文頁数も記して下さい。推薦理由を簡潔にお書き添えいただいても構いません。

送付先：東洋音楽学会 第43回田邊尚雄賞選考委員会

(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

(Fax) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

※ご連絡の受け取り確認などは遅れる可能性もあります。

選考委員：高瀬澄子(委員長)、遠藤徹、奥中康人、
佐本英規、濱崎友絵

会員の受賞

梅田英春さんが、第8回くにたち賞の大賞を受賞されました。くにたち賞は、国立音楽大学同窓会組織「国立音楽大学同調会」が創設し、同大学の卒業生・修了生である「同調会員」の中から、その活動・実績・功績が顕著である人物(または団体)を、会員の推薦に基づき表彰するものです。おめでとうございました。

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど

1. 会費納入のお願い

2025年9月から新しい年度(2025年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払くださいませよう、お願い申し上げます。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号] 00160-6-55723 [加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名] 〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)
[当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済でも会費が納入できます。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧くださいと納入ボタンがあります。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ(<https://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

ICTMD(国際伝統音楽舞踊学会)に関するお知らせ

1. 第9回ICTMD東アジア音楽研究会(MEA)シンポジウム開催のお知らせ

ICTMD東アジア音楽研究会(Study Group on Musics of East Asia=MEA)の第9回シンポジウムは以下の通り開催されます。

日時：2027年7月3日～5日

開催地：国立台湾師範大学

プログラム実行委員(敬称略、アルファベット順)

Anna Yates-Lu

Hyelim Kim

Man-Ying Sheryl Chow

Meng-Tze Chu

Naoko Terauchi

Shuo Niki Yang

シンポジウムの詳細はMEAのホームページをご参照ください

い:

<https://ictmusic.org/studygroup/nea>

2. ICTMD第49回大会開催のお知らせ

ICTMD第49回大会は以下の通り開催されます。

日時: 2027年1月14日~20日

開催地: Universidad Alberto Hurtado, Santiago, Chile

大会テーマ:

- 1) Latin America and the Caribbean in the Region and Beyond
- 2) Digital Media
- 3) Power, Conflict, and Planetary Health
- 4) Spiritual and Religious Performativities
- 5) Queering the Field
- 6) Alternate Histories
- 7) New Research

詳細は<https://www.ictmusic.org/ictmd2027> をご覧ください。

RILM (音楽文献目録) 委員会からのお知らせ

◇『音楽文献目録オンライン』の状況

『音楽文献目録オンライン』では、既刊の冊子体『音楽文献目録』41号以降の文献をWebで掲載中です。事務局に情報が届いた文献のうち、2024年6月に選定された分までの文献が公開されています。それ以降の文献も、順次公開される予定です。同時に既刊の冊子体の目録の遡及入力も行われており、40号と38号、及び35号までが完了し、39号、37号、34号、33号が入力中です。会員のみなさまには過去の目録も含めてWebで検索・閲覧できるようになりつつあります。

また2022年4月1日から開始した『音楽文献目録オンライン』上の広告を引き続き募集(5,000円~)しています。昨年度より母体団体として東洋音楽学会のバナー広告の掲載も始まりました。

なお、冊子体の遡及入力のための基金を募集しており、当学会からも3万円の寄付をいただきました。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

◇東洋音楽学会会員の『音楽文献目録オンライン』へのアクセス

本学会HPに表示される「音楽文献目録オンライン」をクリックした後、IDとパスワードを入力してアクセスして下さい。本学会会報125号に同封された別紙に『音楽文献目録オ

ンライン』にログインするためのIDとパスワードが掲載されています。それらを入力してアクセスしてください。会員限定情報であるため、今後会報には掲載しないこととなりました。IDおよびパスワードについてのお問い合わせは、情報委員会 (togictmt@gmail.com ☆を@に変更してください) までお送りください。

大貫紀子先生を偲んで

野川美穂子

大貫紀子先生は、2025年9月20日にご逝去されました。演奏会などで先生にお目にかかる機会が減り、ご連絡しても以前のご自宅にはいらっしやらないような状況となって、どうしていらっしやるのか気になっていたところに届いた悲しいお知らせでした。大貫先生は、東洋音楽学会の役員を長年おつとめになり、学会に大きく貢献されました。現在の学会の事務所は上野3丁目にあります。その前の事務所(東京藝大に近い谷中5丁目にあった事務所)を探するのに尽力してくださったのも大貫先生であったように記憶しています。ご研究に対しても、学会の仕事に対しても、日常的なことに対しても、いつも丁寧に誠意をもって対処されていて、粗雑な私にとっては憧れの先生でした。大貫先生にお願いすれば安心という存在でいらっしやいましたが、それでいながら、いつも控えめで、絶対に前に出ない、という信念をお持ちであったように思います。大貫先生のご研究は、岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』第3巻(伝播と変容)にお書きになった「明清楽と明治の洋楽」をはじめ、民俗芸能、民俗音楽、地歌箏曲など多岐にわたり、九学会連合の研究調査にも参加されました。東京藝大では、日本音楽の資料の探し方、「板橋の田遊び」を例にした民俗芸能の研究手法、地歌箏曲の歴史など、さまざまな内容の授業を担当されていて、多くの授業を履修させていただいた私にとっては、「大大大」と「大」を何回繰り返しても足りないくらい大きな存在の先生であったのですが、先生と私は関心のある分野が重なっていたこともあり、プライベートでも一緒させていただく機会が多くありました。演奏家で邦楽研究家の中井猛先生のご自宅に毎月のように二人で通って地歌箏曲の話に夢中になったり、京都に二人で旅行したこともあり。大貫先生、薦田治子先生と一緒にいただいた科学研究費による「名古屋における当道音楽の総合的研究」では多くのことを教えていただきました。東京藝大ではレコードやCDなどを視聴する音楽研究センターの視聴室にお勤めでしたので、学生の多くが先生のお世話になっていました。先生の優しいお人柄に甘えながら、公私にわたって多くのご教示をいただき、楽しい時間

をご一緒させていただきましたことを心より感謝しております。大貫先生、ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

会員異動

個人情報のため削除

図書・資料等の受贈

(2025年8月～12月、到着順)

『能楽資料センター紀要』No.36

武蔵野大学能楽資料センター

『狂言鑑賞会20年の上演記録 曲目解説』

武蔵野大学能楽資料センター

『楽道』9,11月号

(公財)正派邦楽会

『日本音楽学会会報』第125号

日本音楽学会

『都市のリズム——旅する音楽、人、街の物語』

石橋純、伊藤嘉章 編著 鹿島出版会

『音楽学』第71巻1号

日本音楽学会

『一音成佛』第54号

虚無僧研究会

『箏曲点字楽譜の誕生——伝統音楽の近代化と盲学校に

おける音楽教育』

村山佳寿子 六花出版

『音を帯びる——カンボジア北東部クルンの「参与」の

民族誌』

井上航 春風社

『声明理論の形成過程——平安・鎌倉期を中心に』

澤田篤子 法藏館

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)、価格(税込)

『X スケープ・デザイン 上 —デザインや芸術の価値を高める—』 明土真也、嘉粹堂、5,500円

『X スケープ・デザイン 中 —音高の記号性と音高信仰—』 明土真也、嘉粹堂、6,600円

『X スケープ・デザイン 下 —雅楽や梵鐘に現われる音高信仰—』 明土真也、嘉粹堂、7,700円

『《アッキーにくらくら》セレクション——元N響クラリネット奏者のスケルツァンドな日々』

加藤明久、音楽之友社、1,980円

『アメリカン・ミュージカルと文化表象』

山本秀行(編著)、渡邊真理香(編著)、小鳥遊書房、3,740円

『あらすじと写真でわかる! はじめての歌舞伎』

利根川裕、世界文化社、1,980円

『あらすじと写真でわかる! はじめての能』

多田富雄(監)、森田拾史郎(写真)、世界文化社、2,200円

『異文化へのまなざし——言語・コミュニケーション・文化を学ぶ』

井上幸孝(編著)、根岸徹郎(編著)、鈴木健郎(編著)ほか

三修社、2,420円

『インド映画はなぜ踊るのか』 高倉嘉男、作品社、2,970円

『ヴェルクマイスター「音楽の逆説的談話」(1707年)全訳』

◆登録事項の変更先

学会ウェブサイトの「名簿情報登録フォーム」をご利用ください。インターネットを使用した回答が難しい方は、学会事務局 (LEN03210@nifty.com または Tel/Fax 03-3832-5152) までご連絡ください。

- と解説』 春秋社、3,300円
- アンドレアス・ヴェルクマイスター(著)、村上曜(編著・訳)
道と書院、3,520円
- 『渦巻の芸術人類学——死と再生のスパイラル』
鶴岡真弓、青土社、4,840円
- 『榎茂都陸平の新舞踊——大正・昭和初期の舞踊改革』
桑原和美、森話社、8,250円
- 『演劇と観光——近代娯楽文化の生態系と舞台芸術』
マーガレット・ウェリー(著)、小畑克典(訳)ほか
福村出版、3,190円
- 『奥三河の花祭と国学者』 山本正名、風媒社、3,080円
- 『音の世界のそのことを』 吉田秀和、音楽之友社、2,750円
- 『音を帯びる——カンボジア北東部クルンの「参与」の民族誌』
井上航、春風社、4,400円
- 『お雛子のある風景・とちぎ』
茂木真弘、随想舎、2,200円
- 『おもしろ合唱事典(新版)』
武田雅博、音楽之友社、1,980円
- 『音楽教育明治百年史(新版)』
井上武士、音楽之友社、3,300円
- 『音楽(小学館の図鑑 NEO POCKET 19)』
直川礼緒(指導協力)、神森徹也(構成)ほか
小学館、1,430円
- 『音楽大学・高校 学校案内 2026 国公立大・私大・短大
・高校・大学院・音楽学校』
音楽之友社(編)、音楽之友社、4,290円
- 『神楽の文化史』 鈴木正崇、法蔵館、4,950円
- 『歌舞伎 四季の巡り』
上村以和於、慶應義塾大学出版会、2,970円
- 『歌舞伎の戦争——十五年戦争とその影』
ジェームズ・R. ブランドン(著)、小田中章浩(訳)、
岩井眞實(訳)、名古屋大学出版会、6,930円
- 『機械仕掛けの音楽誌——自動人形はオペラの夢を見るか』
長屋晃一、アルテスパブリッシング、3,080円
- 『近世演劇への展望』 原道生、文化資源社、9,680円
- 『久高島祭祀論』 吉成直樹、七月社、6,160円
- 『芸術をカテゴライズすることについて——批評とジャンルの哲学』
銭清弘、慶應義塾大学出版会、3,520円
- 『古代の神祇祭祀と大阪の神社』
西宮秀紀、塙書房、15,400円
- 『古代東アジアの祭祀と大嘗祭』
高夢雨、吉川弘文館、11,000円
- 『言葉を奏で、音楽を読む——世紀転換期の〈フランス・オペラ〉をめぐる(春秋社音楽学叢書)』
林信蔵(編著)、中村翠(編著)、川上啓太郎(編著)
- 『これであなたもおもてなしピアニスト!——すぐに使えるヒント集』 豊島奈里、音楽之友社、1,980円
- 『金春の能 中——近世を潤す』
金春安明、金春円満井会、4,950円
- 『シューマンの音符たち——池辺晋一郎の「新シューマン考」(新装版)』 池辺晋一郎、音楽之友社、2,530円
- 『小学校音楽科での実践事例集「わらべうたと遊びで学ぶ音楽」』
藤山和可、教育芸術社、1,650円
- 『生徒がアクティブに聴けるようになる! 中学校音楽科 鑑賞授業の事例集②』 粟飯原喜男、教育芸術社、1,320円
- 『世界音楽の旅——オルガニスト児玉麻里の教会巡行録』
児玉麻里、キリスト新聞社出版事業課、2,090円
- 『ゼロから分かる! 聴けば聴くほど、楽しくなるラテン音楽入門』 伊藤嘉章(監)、岡本郁生(監)、世界文化社、1,980円
- 『戦下の歌舞伎巡業記——柝の音は止まず』
岡崎成美、河出書房新社、3,520円
- 『戦後初期日本のアートとエンゲージメント』
ジャスティン・ジェスティ(著)、山本浩貴(訳)
水声社、6,600円
- 『戦争と芸術の「境界」で語りをはらく——有田・大村・朝鮮と脱植民地化』
山口祐香、チョンユギョン、花東書房、2,200円
- 『箏曲点字楽譜の誕生——伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育』 村山佳寿子、六花出版、6,600円
- 『即興がつなぐ未来——音楽と社会の狭間でおととつ』
音遊びの会、岩波書店、2,750円
- 『高木東六パリ音楽留学日記——1928年~1931年』
藤井浩基、勉誠社、12,100円
- 『楽しい! おもしろい! すごい! と子どもが感じる器楽指導(音楽指導ブック)』 初山正博、音楽之友社、2,640円
- 『血と芸——非世襲・女方役者の覚悟』
河合雪之丞、かざひの文庫、1,870円
- 『超楽器』
鷺田清一(編)、高野裕子(編)ほか、世界思想社、2,200円
- 『伝えたい土佐の民俗——よくぞ土佐に生まれけり』
岩井信子、高知新聞総合印刷、1,760円
- 『都市のリズム——旅する音楽、人、街の物語』
石橋純(編著)、伊藤嘉章(編著)、鹿島出版会、2,640円
- 『にょいこの芸術——嗅覚の美学とアートへの招待』
ラリー・シャイナー(著)、楠尚子(訳)、晃洋書房、3,520円
- 『日韓演劇の比較文化史』 李應壽、晃洋書房、6,380円
- 『ハイドンの音符たち——池辺晋一郎の「新ハイドン考」(新装版)』 池辺晋一郎、音楽之友社、2,310円
- 『東アジア音楽文化としての古琴 (ブックレット《アジアを

学ぼう》別巻30』 榊尾亮子、田中有紀、風響社、880円
『BUTOH—11人の舞踏家に聞く』

小菅隼人、東京大学出版会、7,920円

『ブラームスの真実—ブラームス読本(上)』

マイケル・マスグレーヴ(著)、天崎浩二(監訳)、

福原彰美(共訳)、音楽之友社、3,960円

『ブラームスの一五〇年—ブラームス読本(下)』

マイケル・マスグレーヴ(著)、天崎浩二(監訳)、

福原彰美(共訳)、音楽之友社、3,960円

『ブラック・ウイメンズ・カルチャー—音楽からみる人種
と性の闘いの物語』 白井雅美、明石書店、4,180円

『フリッツ・クライスラー—変幻自在なヴァイオリニスト』

マティアス・シュミット(著)、畑野小百合(訳)、

音楽之友社、2,970円

『文化財を未来につなぐ博物館と学芸員の仕事』

高木徳郎、勉誠社、3,080円

『文化のなかの野性—芸術人類学講義(新装版)』

中島智、アトリエ花粉館、3,850円

『亡命ロシア演劇—ウクライナ侵攻後の亡命演劇とロシア
国内の演劇』 岩田貴、水声社、3,520円

『ポケットいっぱいのおた—実践 子どものうた 簡単に
弾ける162選(3訂版)』

鈴木恵津子(編著)、教育芸術社、2,530円

『見たさ、逢いたさ、思いがつのる 越中八尾おわら風の盆
写真集』 前田賢吾(写真)、かもがわ出版、5,280円

『南・東南アジア・オセアニア民族百科事典』

ジェームズ・B. ミナハン(著)、伊藤眞(日本語版監修)、

村田綾子(訳)、柘風舎、17,600円

『ミニエスノグラフィーの教科書—現場の文脈的理解をめ
ざすフィールドワークへの誘い』

原知章、ナカニシヤ出版、2,970円

『身ぶりと記憶—〈身体の記憶〉をめぐる人類学的探究』
岩谷彩子(編)、菅原和孝(編)ほか、ナカニシヤ出版、3,520円

『もっと聴きたい! さらに知りたい! ショパン・ハンドブック』

伊熊よし子、音楽之友社、1,980円

『物の怪との対話—物の理とデザインとのあいだ』

渡部コウヤ、リフレ出版、2,200円

『ユタに生きる(下巻)』

円聖修(著)、福寛美(監)、南方新社、1,980円

『琉楽・三味線(池宮喜輝著作集2)』

池宮喜輝、ボーダーインク、3,740円

新発売視聴覚資料

●CD

『箏・三弦 古典/現代名曲集(30)』

正派邦楽会、VZCG-856、3,300円

『昭和レトロフォン ~東京ブギウギモデル~』

日本蓄音器商会(ニッポノホン)、CEG-117、27,500円

『箏曲合奏曲集《冨嶽》~中島靖子追善演奏会ライブ2023~』

正派合奏団、VZCG-857、3,300円

『筑波山恋うたつづり』

恩田鳳昇(監修)、COCA-18303、1,500円

『繫—TSUNAGU—』 上妻宏光、COCB-54381、2,750円

『中島勝祐創作賞 第14回 一粒萬倍』

中島勝祐、由有ほか、VZCG-854、3,300円

『ハッよいよよいヨーイトな』

みんようユリism、VZCG-855、2,200円

編集後記

会報第126号をお送りします。今号は、いつもよりページ数が増えていることにお気づきかと思えます。理由は2つあります。一つは、昨年11月に沖縄県立芸術大学で開催された第76回大会のレポートが掲載されていることです。傍聴記や報告記事から、たいへん充実した大会であったことがわかります。もう一つは、支部がなくなったことです。これまで支部別に開催されてきた定例研究会は学会全体で一本化され、おたよりや通信が廃止されて、定例研究会のお知らせや報告が、ウェブサイトと会報に移行しました。今後は基本的に、定例研究会の予定はウェブサイトでご確認ください。会報にもできるだけ掲載しますが、タイミングが合わないこともあります。また、定例研究会の報告は、会報に掲載しますが、発行日の関係で、開催からかなり経ってしまうこともあります。必ず掲載しますので、メールで配信される会報、またはウェブサイトに掲載される会報をご覧ください。情報委員会からのお知らせにもありますように、これからの会報はメール配信およびウェブサイトでの閲覧に移行いたします。紙媒体の郵送にも対応いたしますが、できるだけペーパーレスにご協力をお願いします。

今号は1月号とは言え、発行が2月の半ばにずれ込んでしまいました。大会の日程が例年よりもかなり遅かったこと、編集作業が年末年始を挟んだこと、支部の廃止に伴い会報の守備範囲が拡大したことなど、いくつかの要因が重なりました。無理を言って、短い間に多くの会員の皆様の記事執筆のご協力をいただきました。この場を借りてお詫びと御礼を申

し上げます。そして、原稿の受領、流し込み、資料の入手など、各方面で参事さんたちの大活躍に助けられました。今号は新しい内容が増えましたので、思わぬミスや不手際などがあるかもしれません。会員の皆様には引き続き、会報の発行にご協力、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

高松晃子

会報編集委員会

理事：土田牧子、高松晃子

参事：井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、玉置彩乃、吉岡倫裕

第14回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時：令和7年11月30日(日) 15:50-16:50
2. 場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス 奏楽堂
3. 出席者：294名(委任状提出者66名、書面議決書提出者180名を含む)
〔備考〕正会員534名、定足数267名
4. 議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により早稲田みな子会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、尾高暁子氏・鈴木良枝氏が選出された後、以下の議事を開始した。第2号議案から第4号議案の採決は、塚原康子監事による「監査報告書」【添付書類9】の説明の後に行われた。

第1号議案 令和6年(2024年)度事業報告の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「令和6年(2024年)度事業報告」【添付書類1-1】、「処務の概要」【添付書類1-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 令和6年(2024年)度収支決算の件

前原(笠原)恵美理事(経理担当)より「収支計算書」【添付書類2-1】、「収支計算書内訳表」【添付書類2-2】、「収支計算書に対する注記」【添付書類2-3】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 令和7年(2025年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

前原(笠原)恵美理事(経理担当)より「貸借対照表」【添付書類3-1】、「貸借対照表内訳表」【添付書類3-2】、「財務諸表に対する注記」【添付資料3-3】、「附属明細書」【添付資料3-4】、「正味財産増減計算書」【添付書類3-5】、「正味財産増減計算書内訳表」【添付書類3-6】、「財産目録」【添付資料3-7】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 令和7年(2025年)8月31日現在会員異動状況の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「会員の異動状況(2024年9月1日~2025年8月31日)」【添付書類4】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 その他

議長より発議を諮ったところ、会場からの意見はなかった。

審議終了後、報告事項として、以下の報告があった。

報告事項1. 令和7年(2025年)度事業計画の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「令和7年度(2025年度)事業計画」【添付書類5】の報告があった。

報告事項2. 令和7年(2025年)度収支予算の件

前原(笠原)恵美理事(経理担当)より「収支予算書」【添付資料6】、収支予算書内訳表の報告があった。議長がこの報告に対し質問を議場に諮ったところ、会員より職員の給与について質問と意見があり、早急に対応を行う予定である旨の回答があった。

報告事項3. 支部廃止後の定例研究会の実施について

ギラン、マツト理事(研究企画委員会)より、「支部廃止後の定例研究会の実施について」【添付資料7】の説明があった。

報告事項4. その他

小塩さとみ理事(情報委員会)より、「情報委員会からのお知らせ」【添付資料8】について説明があった。

※添付書類の会報への掲載は一部省略しています。「令和7年(2025年)度事業計画の件」[添付書類5]、「令和7年(2025年)度収支予算の件」[添付書類6]については、『会報』第124号(2025年5月30日発行)11~14ページの「第26回通常理事会添付書類」[添付書類1][添付書類2]をそれぞれご覧ください。

〔第14回定時社員総会 添付書類1-1〕

令和6年度(2024年度)事業報告

(自令和6年(2024年)9月1日 至令和7年(2025年)8月31日)

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2024年11月16日
- ・会場 東京学芸大学
- ・課題 「近代日本音楽の復古と革新 鈴木鼓村と宮城道雄」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2024年11月17日
- ・会場 東京学芸大学
- ・発表件数 28件(共同発表・映像発表を含む)

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2025年11月
- ・会場 沖縄県立芸術大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第142回~第147回 12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 オンライン開催、ハイブリッド開催(大正大学、東京大学駒場キャンパス)、対面開催(武蔵野音楽大学江古田キャンパス)
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 3回(第301回~第303回 3・6・7月)
- ・会場 大阪大学中之島芸術センター、京都市立芸術大学伝音セミナールーム(ハイブリッド開催を含む)
- ・内容 研究発表、公開シンポジウム、修士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 2回(第83回~第84回 2・7月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学(ハイブリッド開催を含む)
- ・内容 研究発表ほか

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第90号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第122号(2024年9月)、第123号(2025年1月)、第124号(2025年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

- 『東日本支部だより』 (Web のみで公開)
 - ・第66号(2024年11月)、第67号(2025年3月)、第68号(2025年6月)、臨時号(2025年8月)
 - ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
- 『西日本支部だより』 (Web のみで公開)
 - ・第103号(2025年12月)、第104号(2025年6月)・第105号(2025年9月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
- 『沖縄支部通信』(Web のみで公開)
 - ・第51号(2025年3月)、第52号(2025年8月)
 - ・内容 沖縄支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

〔3〕 関連学協会との連絡および協力 (定款第5条3)

- (7) 日本学術会議への協力
 - 日本学術会議協力学術研究団体として協力
- (8) 音楽文献目録委員会への参加
 - 会員三名を委員として派遣
- (9) 国際伝統音楽舞踊学会 (ICTMD) への協力
 - 日本国内委員会として加盟
- (10) 東洋学・アジア研究連絡協議会への参加
 - 会員一名を委員として派遣

〔4〕 研究の奨励および研究業績の表彰 (定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

- 第41回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2024年11月16日
 - ・受賞者および授賞対象

平間充子『古代日本の儀礼と音楽・芸能一場の論理から奏楽の脈絡を読む』

2023年2月15日発行、東京：勉誠出版(発売)、勉誠社(制作)、ISBN978-4-585-37006-2

- 第42回田邊尚雄賞の選考と発表

柴佳世乃『仏教儀礼の音曲とことば—中世の〈声〉を聴く—』

2024年2月28日発行、京都：法蔵館、ISBN978-4-8318-6283-9

山田淳平『近世の楽人集団と雅楽文化』

2024年5月1日発行、東京：吉川弘文館、ISBN978-4-642-04363-2

〔5〕 研究および調査 (定款第5条5)

- (12) 国内または国外における学術調査および研究とくになし

〔6〕 その他目的を達成するために必要な事項 (定款第5条6)

- (13) 東洋音楽学会ホームページを通して行う学会情報の提供
- (14) 独立行政法人科学技術振興機構 (JST) 電子アーカイブ事業への参加
- (15) 「人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の遂行

[第14回定時社員総会 添付書類1-2]

2. 処務の概要

[1] 役員等に関する事項

2024年度(令和6年度)末現在

職名	勤務	氏名	任期(開始)	担当職務	報酬	所属など
理事	非常勤	早稲田 みな子	2024/11/16	会長、総務 ※会長就任日は11/17	なし	国立音楽大学
理事	非常勤	小塩 さとみ	2024/11/16	副会長、総務	なし	宮城教育大学
理事	非常勤	マット・ギラン	2024/11/16	東日本支部長	なし	国際基督教大学
理事	非常勤	福岡 正太	2024/11/16	西日本支部長	なし	国立民族学博物館
理事	非常勤	小西 潤子	2024/11/16	沖縄支部長	なし	沖縄県立芸術大学
理事	非常勤	奥中 康人	2024/11/16	機関誌	なし	静岡文化芸術大学
理事	非常勤	金光 真理子 (本姓 村田)	2024/11/16	東日本支部担当	なし	横浜国立大学
理事	非常勤	近藤 静乃 (本姓 青木)	2024/11/16	常務、総務	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	高松 晃子 (本姓 南)	2024/11/16	常務、総務、広報	なし	聖徳大学
理事	非常勤	土田 牧子 (本姓 奥中)	2024/11/16	広報	なし	東京藝術大学
理事	非常勤	配川 美加	2024/11/16	常務、経理	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	福岡 まどか	2024/11/16	機関誌、西日本支部 担当	なし	大阪大学
理事	非常勤	濱崎 友絵 (本姓 元山)	2024/11/16	常務、総務	なし	信州大学
理事	非常勤	前島 美保	2024/11/16	機関誌	なし	国立音楽大学
理事	非常勤	前原 恵美 (本姓 笠原)	2024/11/16	常務、経理	なし	東京文化財研究所
監事	非常勤	塚原 康子	2024/11/16	監査	なし	東京藝術大学名誉教授
監事	非常勤	永原 恵三	2024/11/16	監査	なし	お茶の水女子大学名誉教授、放送大学

支部委員 [東日本支部] 金志善、鯨井正子、黒川真理恵、越懸澤麻衣、鈴木良枝、田辺沙保里、仲辻真帆、福田千絵、伏木香織、森田都紀、山本華子
 [西日本支部] 大久保真利子、齋藤桂、島添貴美子、藺田郁、米山知子、劉麟玉
 [沖縄支部] 遠藤美奈、高瀬澄子、塚原健太

参事 [本部] 明石菜々実、井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、佐藤舞弥、玉置彩乃、長澤文彩、山本佳穂、吉岡倫裕、吉田梨乃(2025年4月～)、李惠平
 [東日本支部] 岩崎愛、神村かおり、澤田聖也、清水春菜、武田有里、褚佳銘、長谷川由依、山内弾正、李嫣寒
 [西日本支部] 志川真子
 [沖縄支部] 鈴木杜萌、多和田真理

[2] 職員に関する事項

2024年度(令和6年度)末現在

職名	氏名	採用年月日	担当事務	手当	交通費	備考
職員	金子由美子	1997/10/22	事務一般	月額80,000円	実費支給	

[3] 会議等に関する事項

(1) 理事会

[第14回定時社員総会 添付書類2-1]

一般社団法人東洋音楽学会

収 支 計 算 書

令和6年9月1日から令和7年8月31日まで

(単位：円)

科 目	年度予算額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	500	4,727	△ 4,227	
基本財産利息収入	500	4,727	△ 4,227	
特定資産運用収入	100	1,110	△ 1,010	
特定資産利息収入	100	1,110	△ 1,010	
入金収入	0	0	0	
会費収入	3,870,000	4,258,500	△ 388,500	
正会員会費収入	3,600,000	3,988,500	△ 388,500	
賛助会員会費収入	150,000	150,000	0	
特別会員会費収入	120,000	120,000	0	
事業収入	1,262,000	1,412,000	△ 150,000	
機関誌発行収入	350,000	324,000	26,000	
大会広告料収入	365,000	400,000	△ 35,000	
大会参加費収入	377,000	392,500	△ 15,500	
懇親会費収入	120,000	241,500	△ 121,500	
食料費収入	50,000	54,000	△ 4,000	
その他事業収入	0	0	0	
補助金等収入	0	0	0	
負担金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	50,000	△ 50,000	
寄付金収入	0	50,000	△ 50,000	
雑収入	0	1,479	△ 1,479	
受取利息収入	0	1,479	△ 1,479	
雑収入	0	0	0	
事業活動収入計	5,132,600	5,727,816	△ 595,216	
2. 事業活動支出				
事業費支出	6,569,000	5,486,621	1,082,379	
給料手当支出	1,200,000	1,120,000	80,000	
臨時雇賃金支出	340,000	68,800	271,200	
法定福利厚生費支出	5,000	4,128	872	
旅費交通費支出	277,000	338,844	△ 61,844	
通信運搬費支出	647,000	442,843	204,157	
消耗什器備品費支出	0	0	0	
消耗品費支出	52,000	11,277	40,723	
賃借料支出	820,000	818,677	1,323	
印刷製本費支出	599,000	448,633	150,367	
諸謝金支出	300,000	79,696	220,304	
租税公課支出	10,000	12,250	△ 2,250	
負担金支出	202,000	202,000	0	
会議費支出	51,000	28,503	22,497	
広報普及費支出	430,000	355,057	74,943	
田邊尚雄賞関連費支出	130,000	140,758	△ 10,758	
会場運営費支出	150,000	240,405	△ 90,405	
機関誌作成費支出	800,000	663,510	136,490	
例会運営費支出	305,000	33,175	271,825	
懇親会費支出	120,000	267,930	△ 147,930	
保険料支出	0	0	0	
事務委託費支出	0	0	0	
食料費支出(雑支出①)	60,000	116,021	△ 56,021	
慶弔費支出(雑支出②)	20,000	29,040	△ 9,040	
手教料支出(雑支出③)	26,000	44,509	△ 18,509	
雑支出(雑支出④)	25,000	20,565	4,435	
管理費支出	530,000	528,000	2,000	
事務委託費支出	530,000	528,000	2,000	
事業活動支出計	7,099,000	6,014,621	1,084,379	

(単位：円)

科 目	年度予算額	決 算 額	差 異	備 考
法人税等の支払額	0	0	0	
事業活動収支差額	△ 1,966,400	△ 286,805	△ 1,679,595	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
基本財産取崩収入	0	0	0	
特定基金取崩収入	1,967,000	130,000	1,837,000	
田邊尚雄賞基金取崩収入	130,000	130,000	0	
研究推進事業基金取崩収入	1,837,000	0	1,837,000	
固定資産売却収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
敷金・保証金戻収入	0	0	0	
投資活動収入計	1,967,000	130,000	1,837,000	
2. 投資活動支出				
基本財産取得支出	0	0	0	
特定資産取得支出	0	0	0	
固定資産取得支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
敷金・保証金支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	1,967,000	130,000	1,837,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
借入金収入	0	0	0	
基金受入収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
借入金返済支出	0	0	0	
基金返還支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
予備費支出	△ 600	0	△ 600	
当期収支差額	0	△ 156,805	156,805	
前期繰越収支差額	0	2,156,975	△ 2,156,975	
次期繰越収支差額	0	2,000,170	△ 2,000,170	

[第14回定時社員総会 添付書類2-3]

一般社団法人東洋音楽学会

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲について

資金の範囲には、現金預金、短期金銭債権債務、前渡金、仮払金、預り金及び前受金を含めることとしている。なお、前期末及び当期末残高は次の2.に記載のとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期末残高
現金預金	1,747,394	1,469,296
未収金	954,000	954,000
前渡金	0	6,600
仮払金	10,683	7,876
計	2,712,077	2,437,772
未払金	130,000	130,000
預り金	12,252	12,252
前受金	412,850	295,350
計	555,102	437,602
次期繰越収支差額	2,156,975	2,000,170

[第14回定時社員総会 添付書類3-1]

一般社団法人東洋音楽学会
(様式1-1)

貸借対照表

令和7年8月31日現在

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	1,469,296	1,747,394	△ 278,098
未収金	954,000	954,000	0
前渡金	6,600	0	6,600
仮払金	7,876	10,683	△ 2,807
流動資産合計	2,437,772	2,712,077	△ 274,305
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
研究推進事業基金	6,946,000	6,946,000	0
田邊尚雄賞基金	460,000	590,000	△ 130,000
特定資産合計	7,406,000	7,536,000	△ 130,000
(3) その他固定資産			
什器備品	7	7	0
書籍	363,500	363,500	0
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	2,000	2,000	0
その他の固定資産合計	665,507	665,507	0
固定資産合計	13,271,507	13,401,507	△ 130,000
資産合計	15,709,279	16,113,584	△ 404,305
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	130,000	130,000	0
預り金	12,252	12,252	0
前受金	295,350	412,850	△ 117,500
流動負債合計	437,602	555,102	△ 117,500
2. 固定負債			
固定負債合計	0	0	0
負債合計	437,602	555,102	△ 117,500
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	0	0	0
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
その他一般正味財産	15,271,677	15,558,482	△ 286,805
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(7,406,000)	(7,536,000)	(△ 130,000)
一般正味財産	15,271,677	15,558,482	△ 286,805
正味財産合計	15,271,677	15,558,482	△ 286,805
負債及び正味財産合計	15,709,279	16,113,584	△ 404,305

注記

当学会は実施事業資産として下記のものを有している。

書籍 価額 363,500円

[第14回定時社員総会 添付書類3-5]

一般社団法人東洋音楽学会
(様式2-1)

正味財産増減計算書

令和6年9月1日から令和7年8月31日まで

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 経常収支の部			
(1) 事業活動収入			
基本財産運用収入	4,727	730	3,997
基本財産受取利息	4,727	730	3,997
特定資産運用益	1,110	24	1,086
特定資産受取利息	1,110	24	1,086
会費収入	4,258,500	4,217,727	40,773
正会員受取会費	3,988,500	3,947,727	40,773
賛助会員受取会費	150,000	150,000	0
特別会員受取会費	120,000	120,000	0
事業収入	1,412,000	1,155,500	256,500
機関誌発行収入	324,000	312,000	12,000
大会広告料収入	400,000	314,000	86,000
大会参加費収入	392,500	339,500	53,000
懇親会費収入	241,500	147,000	94,500
食料費収入	54,000	43,000	11,000
その他事業収入	0	0	0
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	50,000	0	50,000
受取寄付金	50,000	0	50,000
雑収入	1,479	157	1,322
受取利息	1,479	125	1,354
雑収入	0	32	△ 32
経常収益計	5,727,816	5,374,138	353,678
(2) 事業活動支出			
事業費	5,486,621	5,105,413	381,208
給料手当	1,120,000	1,128,666	△ 8,666
臨時雇賃金	68,800	191,980	△ 123,180
法定福利厚生費	4,128	4,517	△ 389
旅費交通費	338,844	242,654	96,190
通信運搬費	442,843	467,176	△ 24,333
消耗品什器備品費	0	0	0
消耗品費	11,277	95,583	△ 84,306
賃借料	818,677	763,391	55,286
印刷製本費	448,633	349,695	98,938
諸謝金	79,696	108,000	△ 28,304
租税公課	12,250	600	11,650
支払負担金	202,000	202,000	0
会議費	28,503	5,751	22,752
広報普及費	355,057	326,339	28,718
減価償却費	0	0	0
田邊尚雄賞関連費	140,758	114,104	26,654
会場運営費	240,405	214,245	26,160
機関誌作成費	663,510	564,457	99,053
例会運営費	33,175	23,375	9,800
懇親会費	267,930	201,000	66,930
保険料	0	0	0
事務委託費	0	0	0
食料費(雑費①)	116,021	63,180	52,841
慶弔費(雑費②)	29,040	9,185	19,855
手数料(雑費③)	44,509	24,096	20,413
雑費(雑費④)	20,565	5,419	15,146
管理費	528,000	528,000	0

(単位：円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
事務委託費	528,000	528,000	0
経常費用計	6,014,621	5,633,413	381,208
評価損益調整前経常増減額	△ 286,805	△ 259,275	△ 27,530
基本財産評価損益等	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 286,805	△ 259,275	△ 27,530
2. 経常外収支の部			
(1) 経常外収益			
固定資産売却益	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
固定資産売却損	0	0	0
固定資産除却損	0	0	0
固定資産減損損失	0	0	0
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 286,805	△ 259,275	△ 27,530
一般正味財産増減額	△ 286,805	△ 259,275	△ 27,530
一般正味財産期首残高	15,558,482	15,817,757	△ 259,275
一般正味財産期末残高	15,271,677	15,558,482	△ 286,805
II 指定正味財産増減の部			
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高			
正味財産期末残高	15,271,677	15,558,482	△ 286,805

[第14回定時社員総会 添付書類4]

会員の異動状況 (2024年9月1日～2025年8月31日)

(令和6年) (令和7年)

●：東日本支部、◆：西日本支部、■：沖縄支部、#：海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2024. 9. 1	2025. 8. 31		
正会員	527	535	+8	新入+27、学生より+5、退会-22、逝去-2 新入+7、正会員へ-5、退会-1
学生会員	7	8	+1	
賛助会員	3	3	0	
特別会員	6	6	0	
名誉会員	2	2	0	
	545	554	+9	

(第14回定時社員総会 添付書類 9)
一般社団法人東洋音楽学会

監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会
会長 早稲田 みな子 殿


令和7年10月7日

(2025年)

監事

塚原 康子 

監事

永原 恵三 

私たちはそれぞれ、令和6年9月1日から令和7年8月31日までの令和6年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 令和6年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上